兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
永久保存（10－5）

兵庫県埋蔵文化財調査報告　第103冊

洲本城武家屋敷跡

―洲本山手公舎建設事業に伴う発掘調査報告書―

1991

兵庫県教育委員会

兵庫県埋蔵文化財調査報告　第103冊

洲本城武家屋敷跡

―洲本山手公舎建設事業に伴う発掘調査報告書―

1991

兵庫県教育委員会

例　　言

1．本書は洲本市山手１丁目４－14に所在する洲本城武家屋敷跡の発掘調査報告書である。

2．調査は、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が、兵庫県総務部管財課からの依頼を受け、平成２年10月に確認調査を、平成２年12月～同３年１月に全面調査を実施した。

3．確認調査は管財課の直接執行で、全面調査は兵庫県教育委員会が、横道建設株式会社に委託して実施した。

4．挿図中の方位は全て磁北で、座標北は磁北に対してＮ６°20′Ｅである。

5．標高は東京湾海水準（T. P.）を基準とした。

6．遺構の平面図作成に当たっては、調査地区内に設定した任意の基準線を基本として作成している。

7．遺構写真は調査担当者が、遺物写真は日之出写真館が撮影した。

8．遺物の実測・トレースは、土器・木器については井川佳子が、石器・金属器については古谷章子が担当した。また、遺構図のトレースも井川が担当した。

9．本文の執筆ならびに編集は、村上賢治が行った。

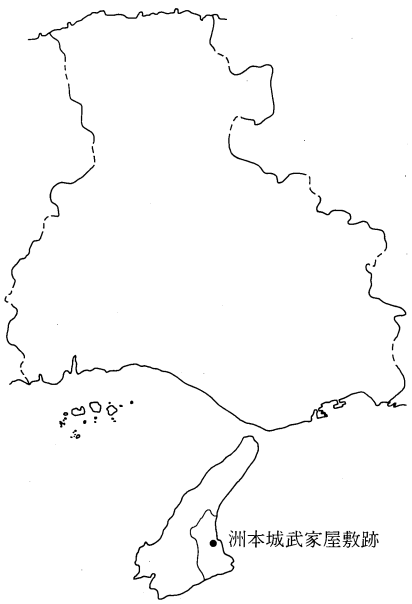
10．洲本城武家屋敷跡の調査に関する遺跡調査番号は、次の通りである。

確認調査　９００１１１

全面調査　９００１１２

11．本報告書にかかる出土遺物及び図面・写真等の資料は、兵庫県埋蔵文化財調査事務所（神戸市兵庫区荒田町２丁目１－５）ならびに兵庫県教育委員会魚住分館（明石市魚住町清水字立合池ノ下650－１）で保管している。

12．本報告書に掲載している第１図及び第２図は、洲本市が作成した都市計画図を元に作成した。また図版１「洲本城城下町絵図」は、ポジフィルムを洲本市教育委員会から借用した。本報告書の作成に当たっては、洲本市教育委員会　社会教育課　浦上雅史氏に多大なる協力を得ており、深く感謝します。



遺跡の位置

本 文 目 次

第１章　はじめに
　第１節　調査に至る経過と調査の概要 …… 1
　第２節　調査と整理の体制 …… 3

第２章　遺跡の概要
　第１節　遺跡の環境 …… 4
　第２節　土層堆積 …… 4

第３章　調査の成果
　第１節　遺　　構 …… 6
　第２節　遺　　物 …… 11

第４章　ま と め …… 19

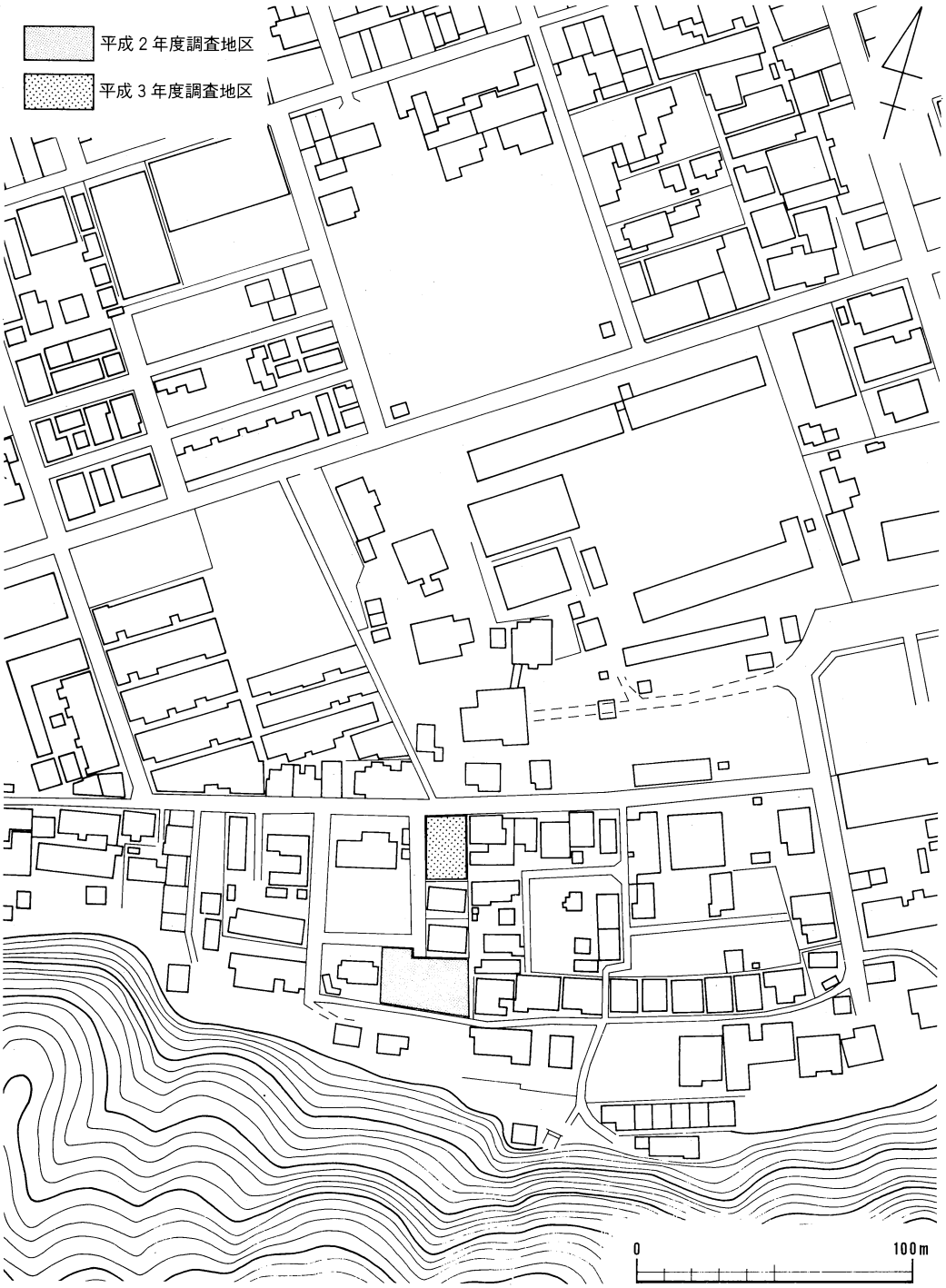
挿 図 目 次

第１図　位　置　図
第２図　調査地区位置図
第３図　調査地区　地区割図 …… 1
第４図　パネルダイヤグラム …… 5
第５図　遺構配置図 …… 6
第６図　石列と溝１　平面図 …… 7
第７図　石列　平面・立面図 …… 8
第８図　池　平面・断面図 …… 9
第９図　溝２　平面・立面図 …… 10
第10図　遺物実測図１(確認調査) …… 11
第11図　遺物実測図２(池) …… 12
第12図　遺物実測図３(池) …… 13
第13図　遺物実測図４(２区) …… 14
第14図　遺物実測図５(１区　その他) …… 15
第15図　瓦　実測図１ …… 15
第16図　瓦　実測図２ …… 16
第17図　石製品　実測図 …… 17
第18図　木製品・金属製品　実測図 …… 18
第19図　平成３年度確認調査位置図 …… 19
第20図　平成３年度確認調査
　トレンチ実測図 …… 20
第21図　洲本城城下町絵図(模式図) …… 21
第22図　現況と調査成果 …… 21
第23図　洲本城武家屋敷復元図 …… 22

図　版　目　次

図版Ⅰ　絵図（上）洲本城御城下絵図（文政年間頃）
（上）　同　（調査地区周辺のアップ）
図版Ⅱ　遠景（上）遠　景（洲本城天守閣より）
（下）全　景（東から）
図版Ⅲ　遺構（上）石列と池（北から）
（下）石列と池（北西から）
図版Ⅳ　遺構（上）石　列（北西から）
（下）石列と溝１の交差点（東から）
図版Ⅴ　遺構（上）石列内　遺物出土状況
（下）池の土層堆積
図版Ⅵ　土層（上）３区北壁
（中）同 アップ
（下）１・２区北壁
図版Ⅶ　遺物（土器）
図版Ⅷ　遺物（土器）
図版Ⅸ　遺物（土器・土製品）
図版Ⅹ　遺物（瓦・木製品・石製品・鉄製品）

第１図　位　置　図



第２図　調査地区　位置図

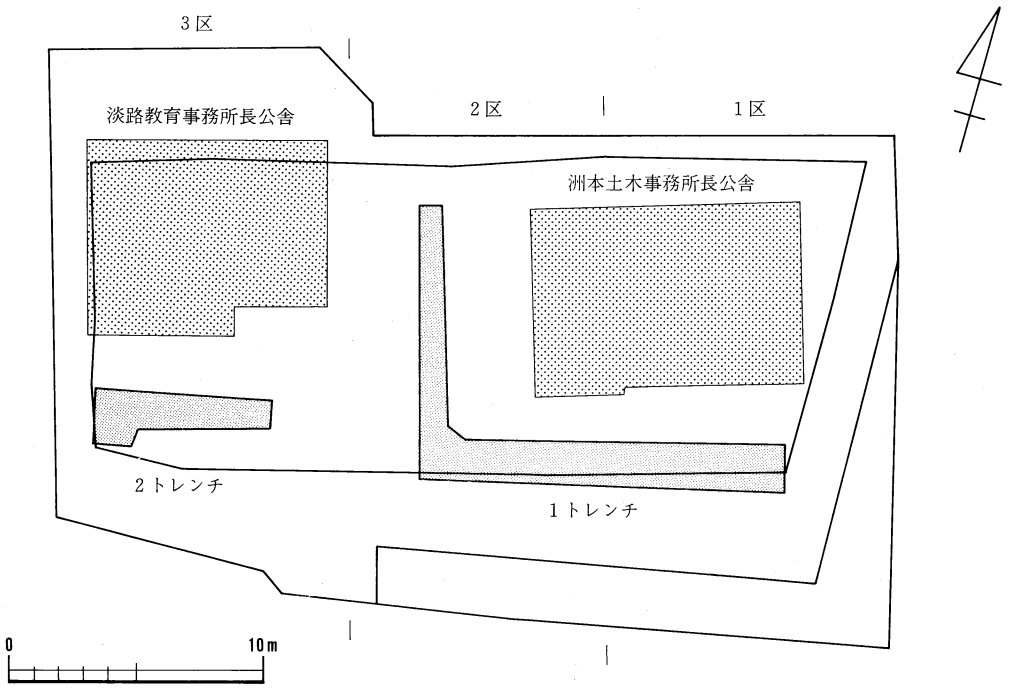
第1章　はじめに

第1節　調査に至る経過と調査の概要

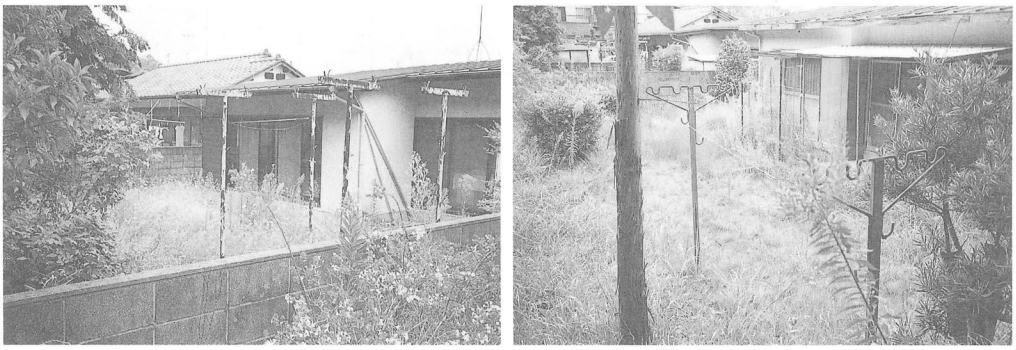
兵庫県洲本市山手1丁目に所在する洲本土木事務所長公舎と淡路教育事務所長公舎が老朽化のために改築されることになり、埋蔵文化財の有無についての照会が、兵庫県総務部管財課から兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所にあった。

埋蔵文化財調査事務所では、①隣接する洲本市立老人憩いの家が建設される際に弥生時代の遺物が採集されていること(山下町遺跡)、②江戸時代の絵図　から、当該地が洲本城の城下町(内町)に当たり、武家屋敷が存在していた場所であるとの理由により、管財課に対し確認調査が必要であると回答をした(9月5日協議)。

山手公舎の建設工事は、この時すでに入札が済んでいたため(9月4日)、管財課から至急に確認調査を実施してほしいとの依頼があった(9月26日)。そのため、埋蔵文化財調査事務所では急遽10月1日から3日間、確認調査を実施することとなった。



第3図　調査地区　地区割図



調査前の状況　(左)2トレンチ　(右)1トレンチ

確認調査（平成2年10月1日～10月3日）

調査は、兵庫県総務部管財課が作業員・機械などを用意し、埋蔵文化財調査事務所は職員を派遣して実施した。

調査は、まずバックホーで掘削し、その後人力によりトレンチの壁面及び平面の精査を行い、遺構・遺物を検出する方法をとった。建物を解体する前に調査を実施したため、調査箇所は必然的に通路部分及び庭部分に限られた。洲本土木事務所長公舎の敷地内にL字形のトレンチを(1トレンチ)、淡路教育事務所長公舎に1本のトレンチ(2トレンチ)を設定し、調査を行った。

その結果、当初予想していた弥生時代の遺構・遺物(山下町遺跡)は認められなかったが、1トレンチで築地塀の基礎と思われる石列を検出し、2トレンチでは生活面と思われる土層の堆積が認められた。遺物はトレンチ全体から出土した。

1トレンチ　石列検出状況

全面調査

(平成2年12月10日～平成3年1月20日)

確認調査の結果、建設予定地内全域に遺構が存在することが判明したので、11月8日管財課より全面調査の依頼文書が提出されたが、埋蔵文化財調査事務所としては、年度内に調査を実施することは派遣する調査員がいないなどの理由で無理であると判断した。しかし、本体工事が既に入札済であったため、発掘調査を実施して欲しいという管財課からの強い要望があり、12月から調査を実施することとなった。

兵庫県教育委員会は管財課と発掘調査に関する委託契約を結び、全面調査を実施した。なお、全面調査を行う前に、本体工事の側で建物の解体を実施し

た。また、解体後の基礎の掘削・撤去については、埋蔵文化財調査事務所職員が立会い、掘削が遺構面に及ばないように注意して行った。(平成２年12月３日～12月５日)。

調査の結果、確認調査の際に検出した石列と溝２本および池を検出した。

第２節　調査と整理の体制

１．調査の体制

発掘調査は、兵庫県総務部管財課の依頼を受け、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所(調査第２課担当)が平成２年度に実施した。調査期間は、確認調査が平成２年10月１日から10月３日、全面調査が平成２年12月10日から平成３年１月20日である。

〔埋蔵文化財調査事務所〕

事務担当

所　長	内田　隆義
副所長	才木　繁
副所長	村上　紘揚
調査第２課長	池田　正男
技術職員	村上　賢治

調査担当

(確認調査)	調査第２課	
	技術職員	村上　賢治
(全面調査)	調査第２課	
	主　査	西口　和彦
	技術職員	村上　賢治
	同	西口　圭介
	同	甲斐　昭光
	同	長濱　誠司

２．整理の体制

調査で出土した遺物については、平成３年度に水洗い・ネーミング・接合・復元・実測・拓本・トレース・レイアウトの全作業を埋蔵文化財調査事務所にて実施した。

〔埋蔵文化財調査事務所〕

事務担当

所　長	内田　隆義
副所長	駒井　功
総務課長	田中　豊英

整理事務担当

整理普及課長	松下　勝
課長補佐	小川　良太
金属器担当	加古　千恵子
木器担当	別府　洋二

整理担当

主　任	村上　賢治
嘱託職員	井川　佳子
同	古谷　章子

第２章　遺跡の概要

第１節　遺跡の環境

調査地点は洲本市山手１丁目に位置しており、旧洲本城が立地する三熊山の北側の山裾にあたる。山頂の洲本城は、室町時代末期(16世紀初頭)頃に安宅氏により築城されたといわれる。天正10年には安宅氏から菅平右衛門・仙石秀久に移ったが、天正13年に脇坂安治が洲本を治めるようになり、この後24年間にわたって脇坂氏の領有する所となっている。脇坂氏以後は藤堂高虎の代官が在城したりしたが、池田輝政の領国となって以降、岩屋・由良に新城を築き、洲本城は事実上廃城となる。

寛永８年(1631年)から同12年にかけて、蜂須賀氏により由良から城や武家屋敷・町屋・寺院などを洲本へ移す「由良引け」が行われた。今回調査を実施した武家屋敷跡もこれに伴って計画的に造られた城下町にある。洲本城の城下町は大きく「内町」と「外町」に分けられるが、調査地点は「内町」に属している。この由良引け後、山下に城館が造られ（現淡路文化資料館・裁判所敷地)、事実上山下の城が政治の中心となる。

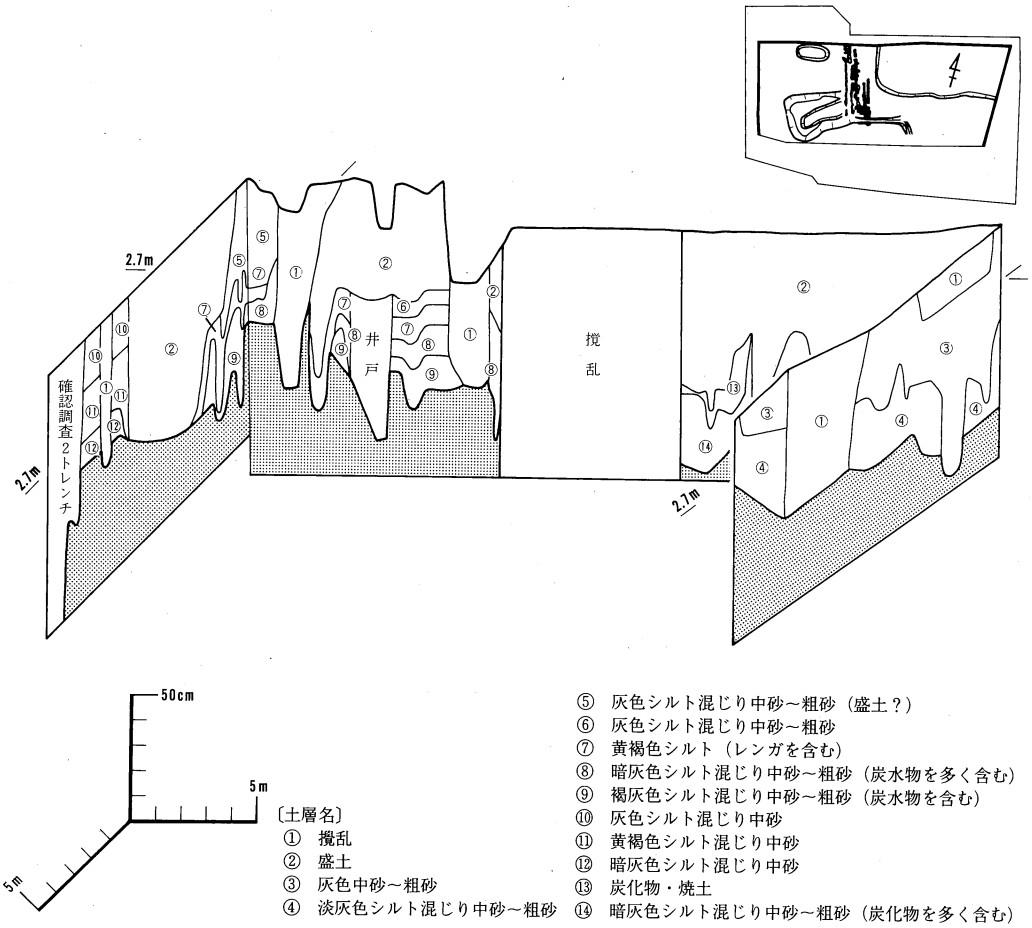
調査地点は平地が山に接する山裾にあり、現在の標高は約2.8ｍを測る。遺構を検出した面は標高約2.0ｍと低く、また山裾でもあるため、検出した池(後述)では常に湧水があった。

第２節　土層堆積

調査地区は、北辺が30ｍ・南辺が27ｍの台形をしているため、便宜上東から10ｍずつ３地区に区切り、東より「１区」・「２区」・「３区」とした。

調査地区全体として見ると、現地表面の下には旧公舎の基礎が井桁状に深くはいっており、約40～80㎝は公舎建築の際に攪乱されている。またこの攪乱層の下には、部分的に遺物包含層がみられ整地層と考えられるが、この層中に明瞭な遺構面は検出できなかった。部分的に石列が見られる箇所もあったが、全体に及ぶものではない。また後述の溝２もこの整地層中での検出であるが、石組みの溝以外は生活面がはっきりせず、遺構を検出できなかった。

１～３区の南壁の土層の堆積状況は、山裾に当たるため、現地表面の下40㎝ですぐ地山となっている。１区の東壁と北壁を見ると、ほとんど攪乱層と整地層である。また１区の中央から北にかけては、一段低くなっており、この部分も攪乱層が堆積しているのみである。この状況は２区の東半分でも同じである。



第４図　パネルダイヤグラム

最も土層堆積の状況が良く遺存しているのは、３区の北壁・西壁である。また確認調査の２トレンチでも同様の状況であった。上層は現表土と攪乱層であるが、第12層暗灰色シルト混り中砂は地山直上で認められ、安定した面を形成している。この面は攪乱は受けているものの３区ほぼ全域に広がっている。この土層中には、炭も混じっており、生活面と考えられる。ただ、調査の過程では、この第12層は８㎝と薄かったため、遺構の検出は地山面で行った。

地山と考えたのは黄褐色シルト混り中砂～細砂であるが、この層の下は砂の堆積が認められ、遺物は全く出土していない。

今回の調査地区をみると、全体的には南西から北東にかけて緩く傾斜している。特に１区・２区東半は調査中でも水捌けが悪かったが、南側を見ると、この地点が小さな谷の裾に当たっていることが分かる。従って住居の立地条件としては、調査地区の西半の方が東半よりも良いと考えられる。

第３章　調査の成果

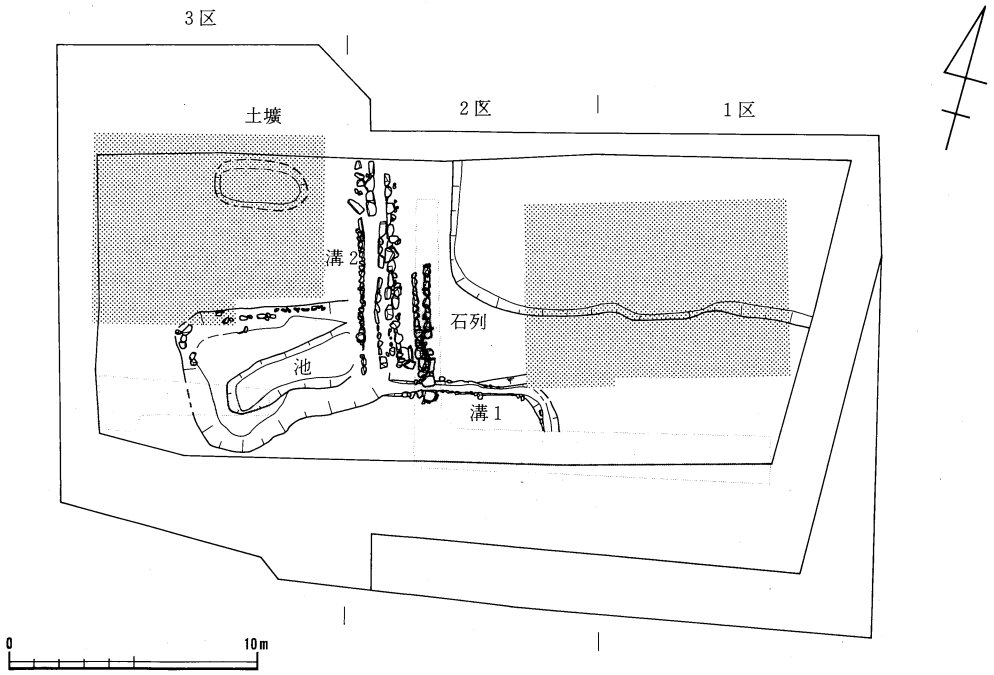
第１節　遺　　構

検出した遺構は、石列と池・その池に注ぐ溝１と土壙、そして石列の上層で検出した溝２である。

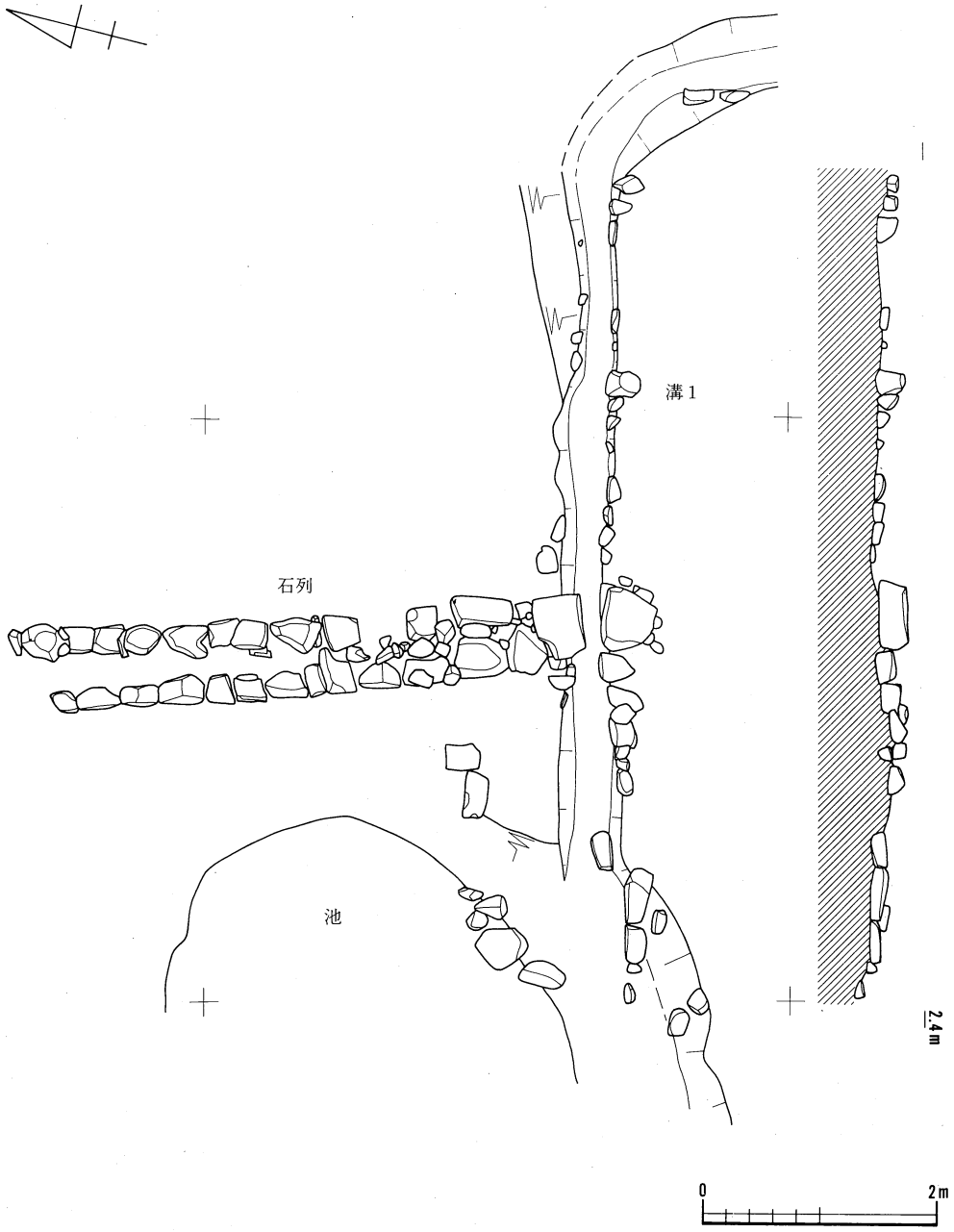
石　列

２区中央で検出した南北方向の石列である。確認調査時に１トレンチで検出し、全面調査を行うきっかけとなった。

検出できた部分の全長は5.6ｍ、幅は60㎝を測る。現状では南端に２つの大きな石があり、この石から北に２列の石列がみられ、東側は12石・西側は13石が遺存している。東側の石列のうち南端から２石目と３石目の間が平面図では空白となっているが、これは確認調査の重機掘削時に取り上げてしまったもので、本来はこの部分にも１石が置かれていたものである。石列の北端以北は後世のゴミ穴のため攪乱を受けていた。東西両方の石列とも外側の面をあわせて据えられており、明らかに外側を意識した構造であり、築地塀の基礎であると考えられる。



第５図　遺構配置図



第6図　石列と溝　平面図

遺存状況は、基底部の一石が残っていたのみである。石は比較的小振りのものを使用しているが、南端で検出した２石は40㎝×60㎝×高さ30㎝と大きい。この２石の間は約20㎝隙間があり、この隙間に後述する溝１が流れていた。したがって、この２石の向かいあった面はほぼ垂直にたてられている。

遺物は第16図の58が出土している。図面上は１点であるが、これを２つに割り、基底石の下に挟んでいた。

溝　１

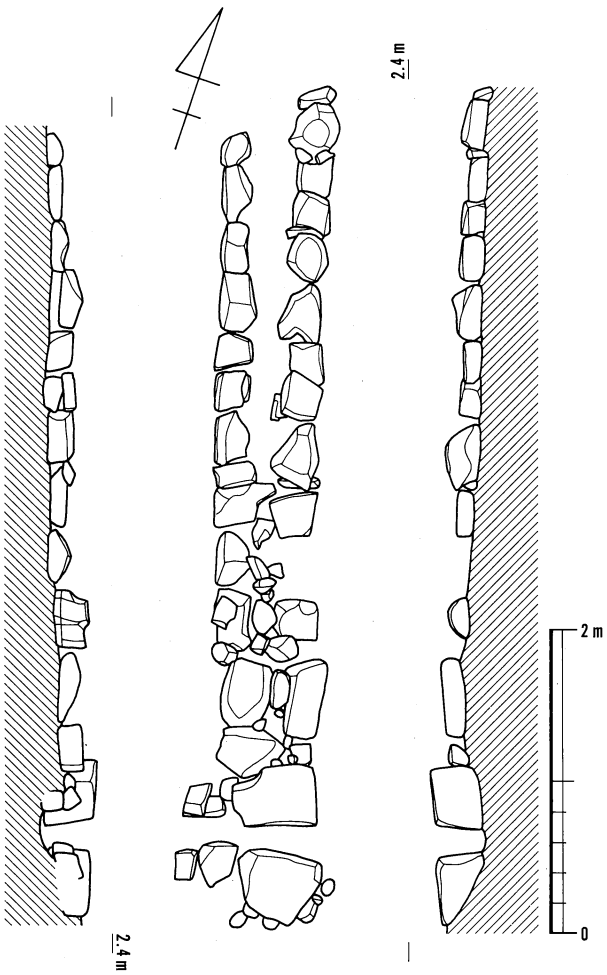
石列の南端の石の間を流れる溝である。石列から東に延び、東約４ｍの箇所でほぼ90度南に屈曲する。また、石列から西は真っ直ぐ延び、池の所で終わる。幅は40㎝、全長は約7.5ｍを測る。溝の肩には、部分的にではあるが石が見られ、元々は石組みの溝であったと思われる。

この溝は、南東の山裾から池に水を導くためのものと思われるが、あまり傾斜を持っておらず、比高差は４㎝を測るのにすぎない。

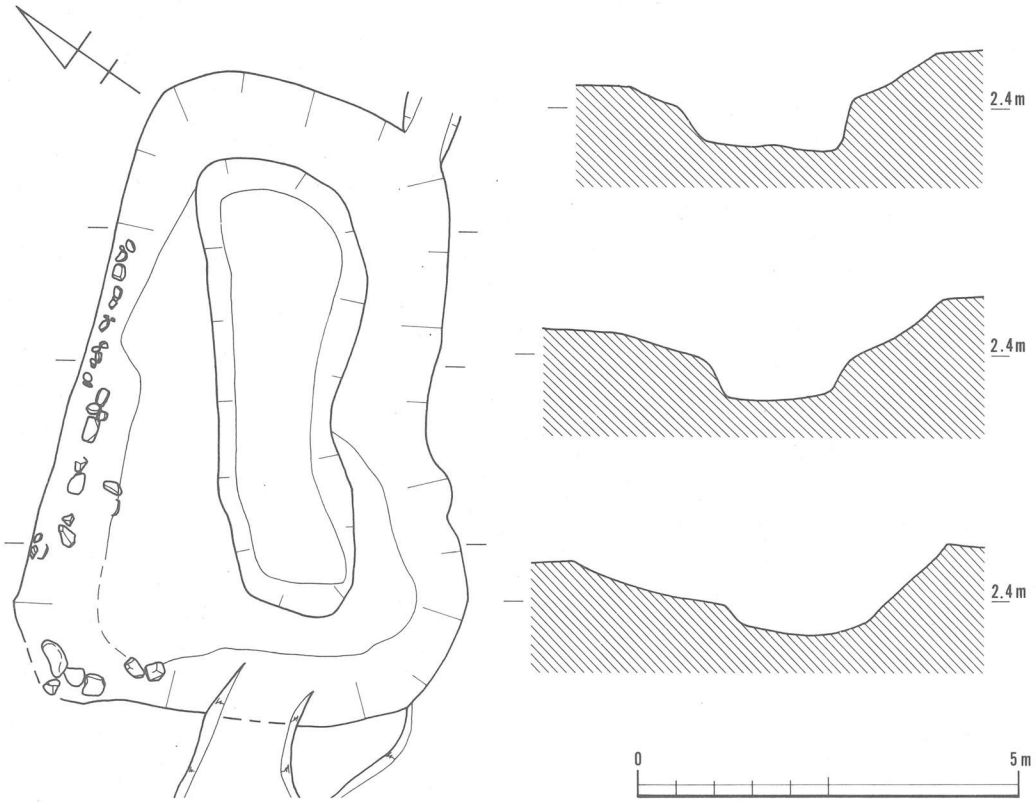
池

３区南半で検出した遺構で、全長8.5ｍ幅約５ｍ前後の方形をしている。断面を見ると、池は２段に掘られており、下段の掘り込みはほぼ垂直に掘られており、長さは６ｍ・幅は約２ｍと細長い。この下段の肩から上段の肩へは約30°～40°の傾斜で上っている。

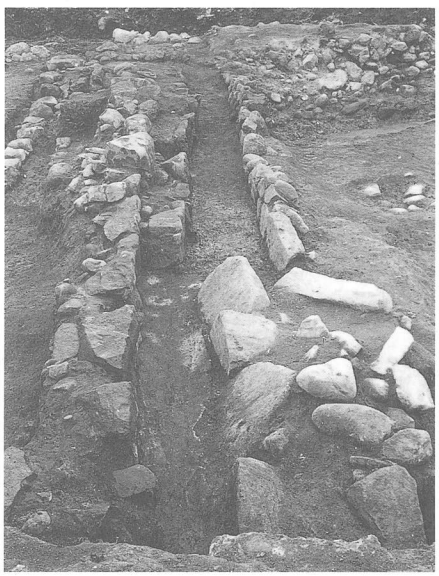
池の南側の壁面は、石を貼ったように見えるが、これらの石は地山に含まれる石を利用したものとおもわれた。北側では、肩部に石が直線状に並べられているのみで、貼り石状のものは認められなかった。これは池が北側から眺められる事を意識しているためであると思われる。



第７図　石列　平面・立面図



第8図　池　平面・断面図



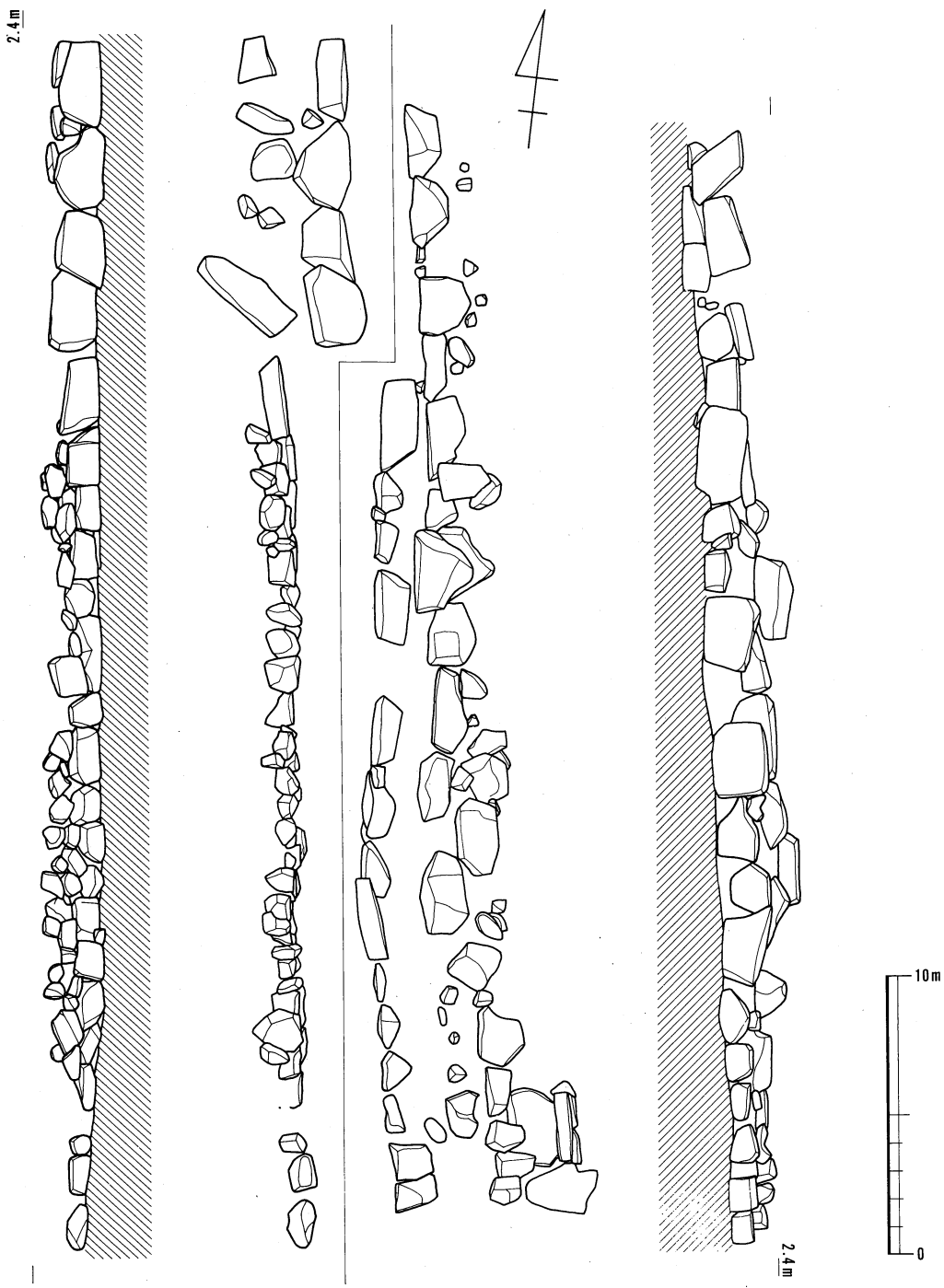
溝2　全　景(北から)

土層の堆積状況は、ほぼ上段と下段を境に大きく2層に分けられ、上層・下層ともに黒色シルトが堆積している。下層の方が粒子が細かく泥に近い。

遺物は両層から出土しているが、上層の遺物と下層の遺物が接合しており、また下層から明治以降の土器も出土している。また下駄や廃材などの木材も多く出土している。創造を逞しくすれば、この池は明治以降に家を建て替えた時に、一気に埋められたものと思われる。

溝　2

石列の上層で検出した溝で、石列と池の間に位置し、石列とほぼ同じ方向を向いている。溝は全長8.5m・幅60mを計り、南側から2.4mの所で東に屈曲し更に北に延びている。溝の壁は石が組まれてい



第9図　溝2　平面・立面図

るが、東壁よりも西壁の方が小さな石を使用している。また屈曲部から北側はより大きな石材が使用されている。また、東側の石組みは２列あり、２段をなしている。

溝の底は、新しい時期にモルタルが貼られている。また石列の裏込めからは明治以降の染付椀が出土しており、この溝は明治以降につくられたものである。

洲本土木事務所長公舎と淡路教育事務所長公舎の境界のブロック塀は、溝２の上に築かれており、南側では塀の基礎が溝の中に作られている。

土　壙

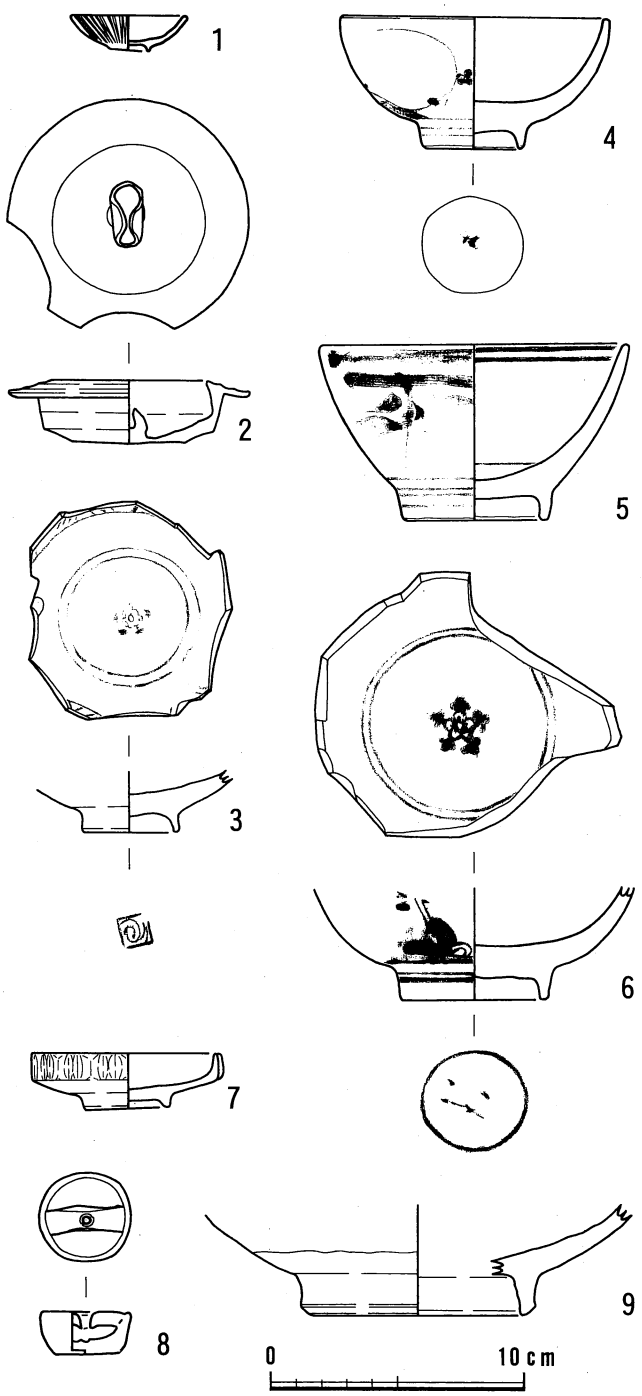
３区の北端で検出した遺構であるが、ほとんどが攪乱を受けており、規模がわかるだけである。形状は楕円形で、長軸3.8m・短軸2.0m、遺存していた深さは25cm前後を計る。時期は不明である。

第２節　遺　　物

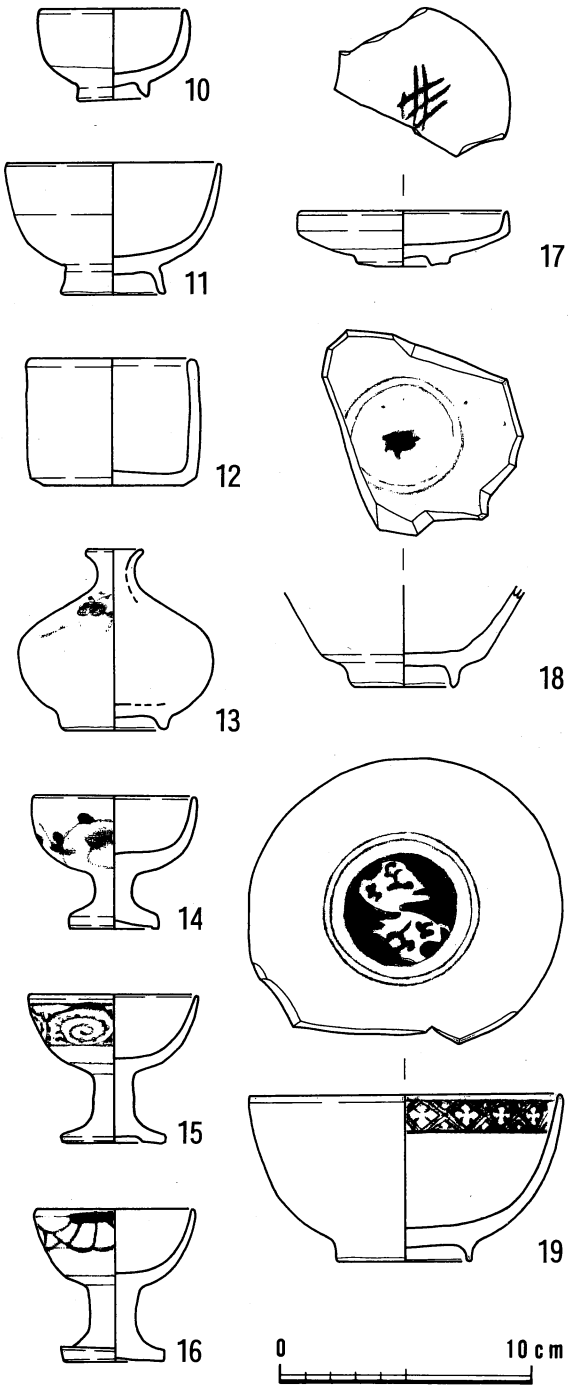
遺物は、調査地区の全域から出土しているが、ほとんどが攪乱層と包含層からのものであり、遺構に伴うものは少ない。ただ、池からは多量の土器や木製品・建築材が出土している。

土　器（第10図～14図）

土器は染付を中心として様々な



第10図　遺物実測図１（確認調査）



第11図　遺物実測図２（池）

ものが出土している。３～６・25～34・43・44・50は伊万里焼きの染付椀であり、出土遺物の中で最も数が多いものである。５は広東椀である。18・19は染付青磁であり、伊万里焼きと思われる。また、13～16も伊万里焼きである。

20・21は瓦質の茶釜であり、どちらも外面に煤が付着している。器壁がやや荒れており、金型により製造されたものと推測される。

22～24・39は擂鉢であるが、22・24は堺の湊焼きと思われる、24は「上長」の刻印が見られる。23・39は丹波焼きの擂鉢である。

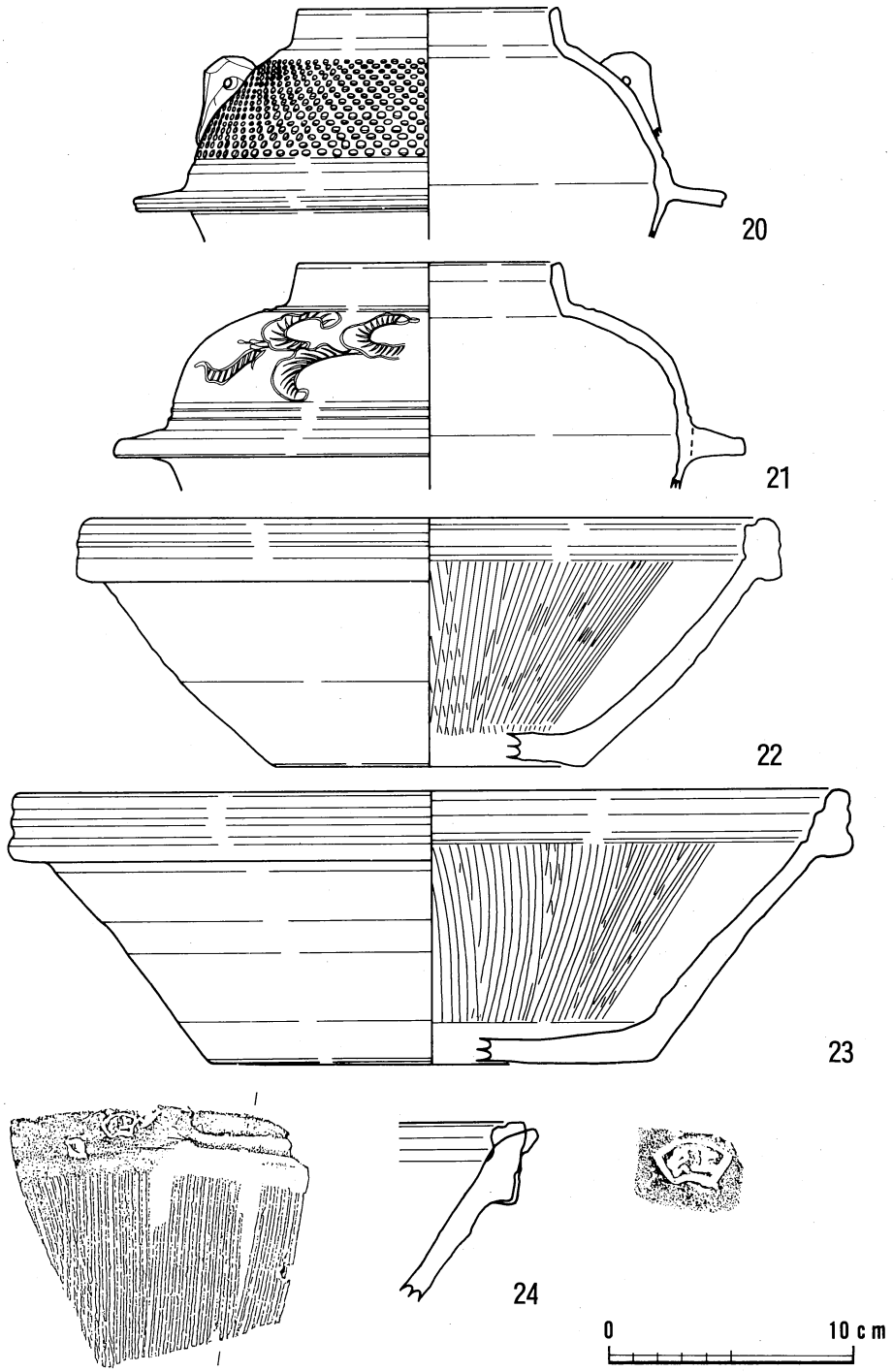
９・38は唐津焼きであり、38は面子に転用している。面子はこの１点が出土したのみである。

以上の他に、土師質の小皿48・49や京焼きの小皿17、陶製の土錘などが出土している。また調査の際には淡路の珉平焼きの破片も認められた。

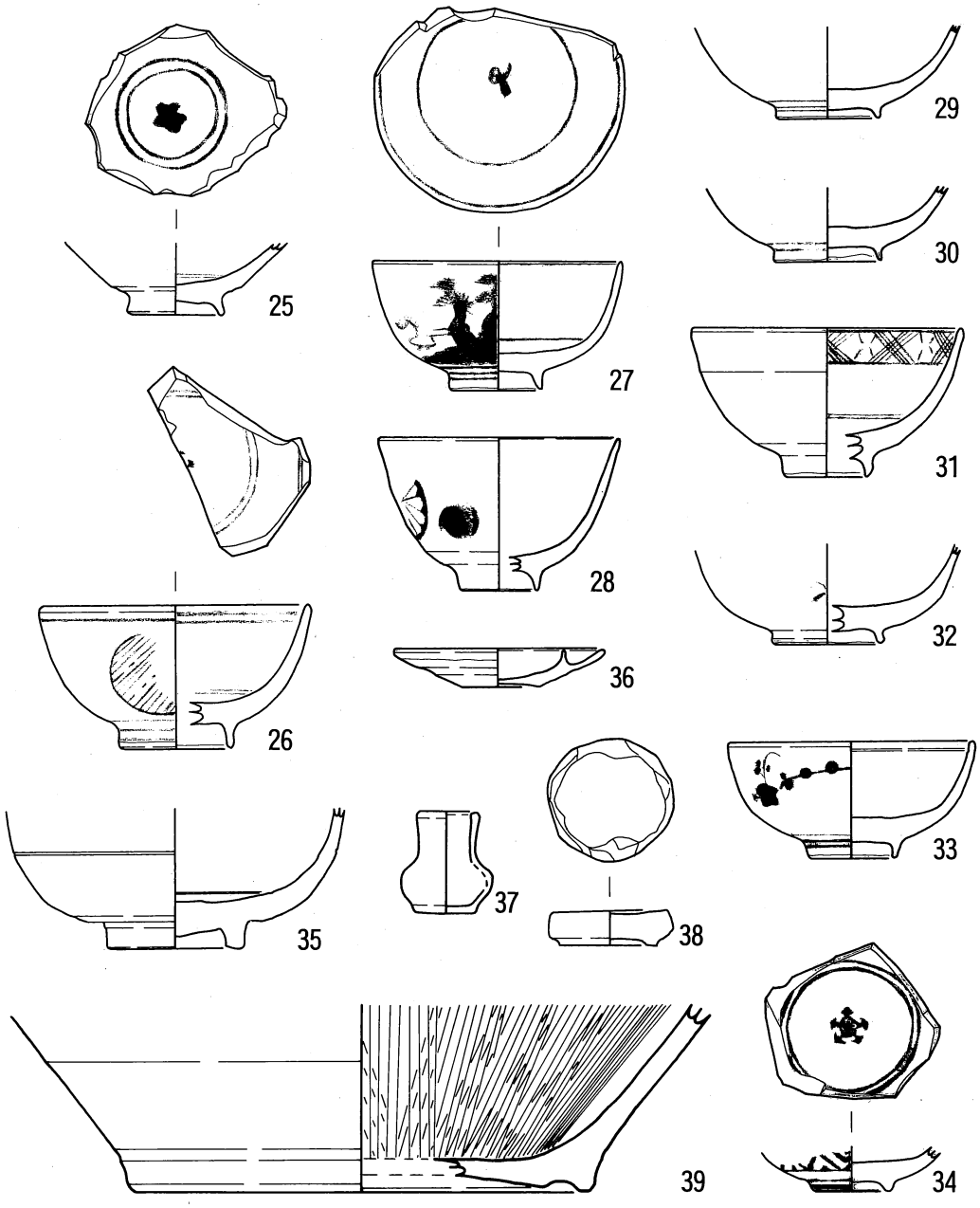
瓦（第15・16図）

52・57は２区包含層、53は確認調査の１トレンチ、54・56は池の下層、55は溝１から、58は石列の基底石の下から出土した。

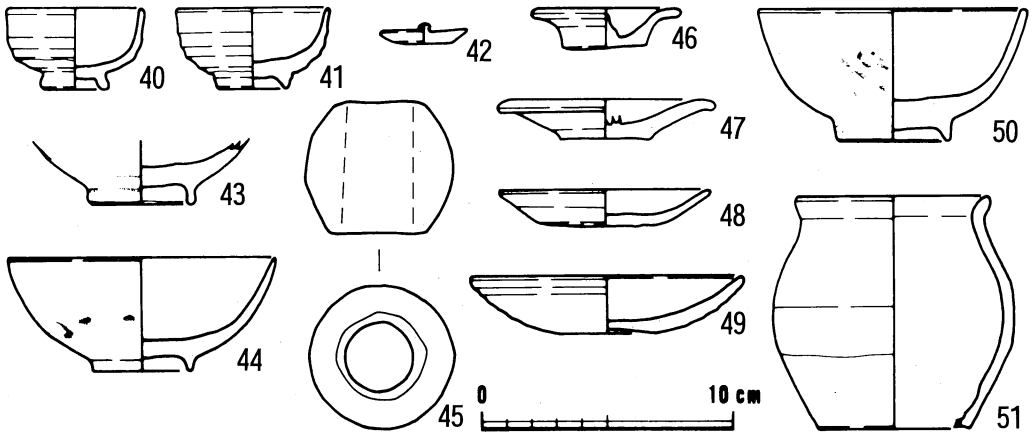
52・53は菊丸である。54は巴瓦であるが、裏面は丁寧にナデて仕上げられている。巴は左巻きである。55は巴の軒丸瓦である。56は鳥伏間の先端と思われる。この他にも瓦は出土しているが、桟瓦も多く、軒丸瓦と桟瓦が同時に出土している。57は２区南端の地山面直上から出土



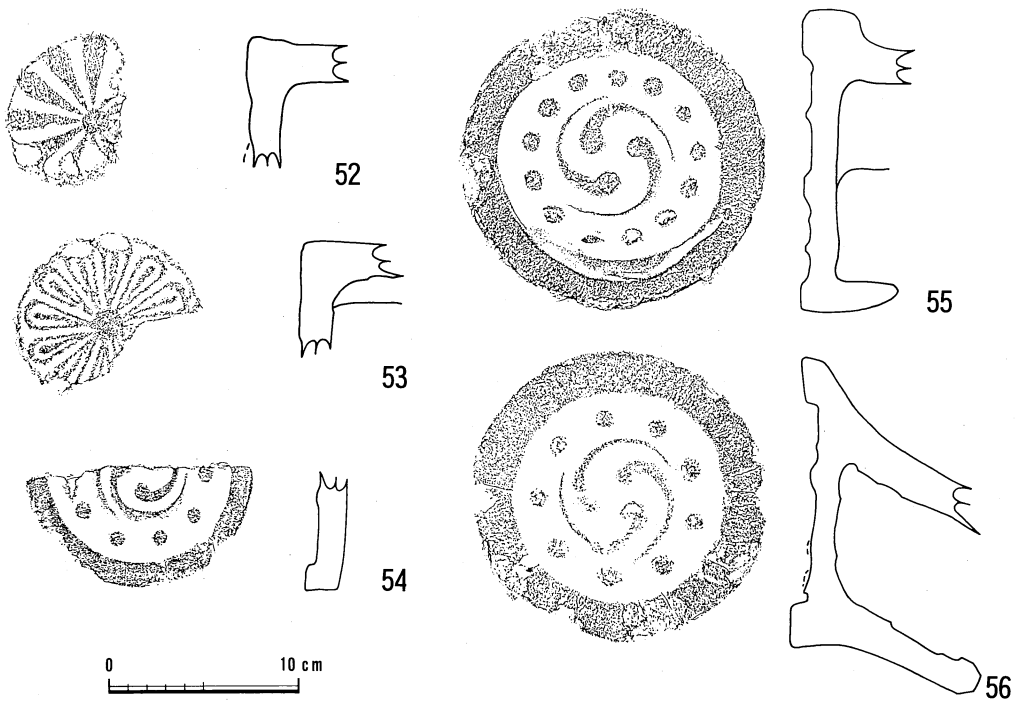
第12図　遺物実測図３（池）



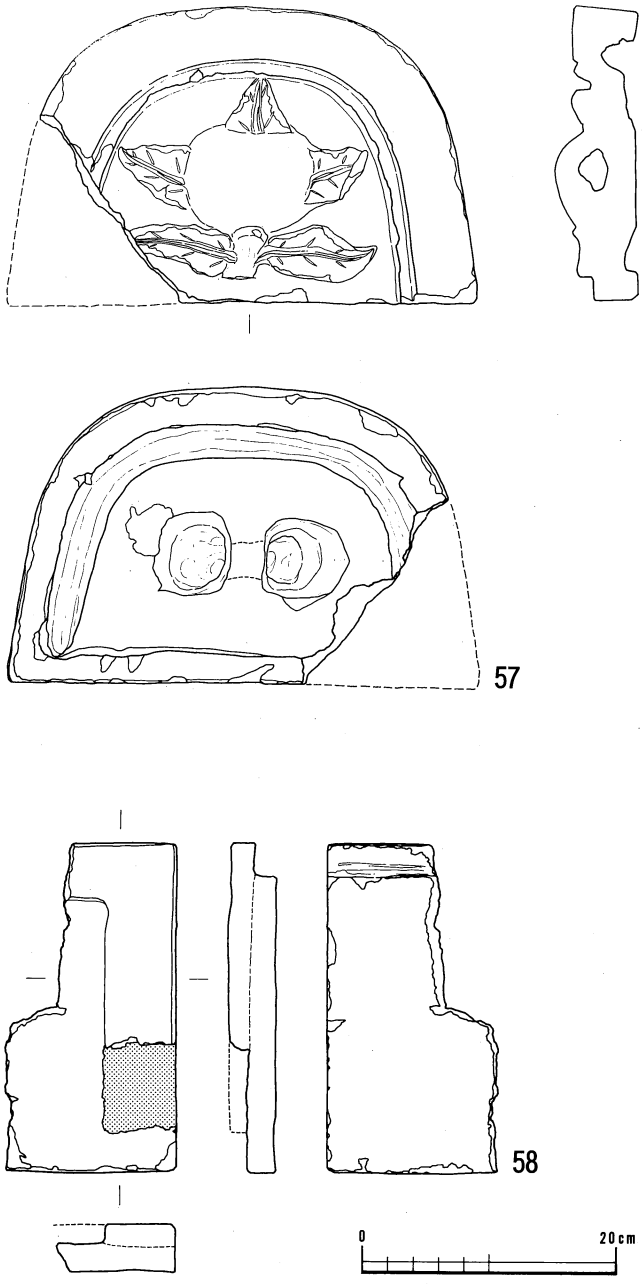
第13図　遺物実測図４（２区）



第14図　遺物実測図５（１区・その他）



第15図　瓦　実測図１



第16図　瓦　実測図２

した鬼瓦である。表面は植物を文様としており、中央に実を置き、周囲に葉を５枚配置している。58は熨斗瓦の一種ではないかと思われるが、平坦な瓦であり、別の用途の瓦かも知れない。欠損しているため幅は不明であるが、長さは26cm・厚さ２cmを計る。図上の網掛部分には剝離痕が見られ、平たい板上のものに「コ」字肩に幅5.5cmの枠を付けた瓦である。実測図の上方の部分を別の瓦の下方の部分に重ね合わせて使用するものと思われる。

石製品（第17図）

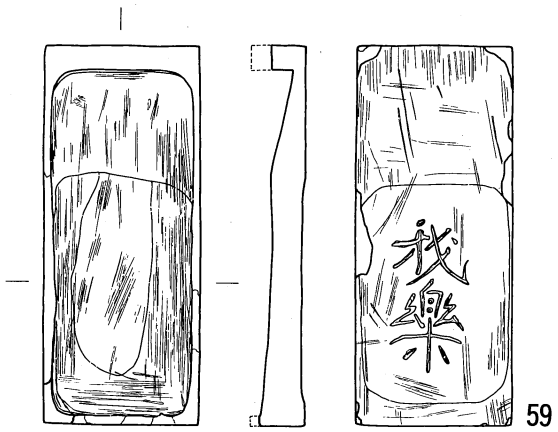
59は、池から出土した石製の硯で、石材は緑泥片岩と思われる。表面はよく使われており、墨が付着している。裏面は下半分を窪ませ、筋掘りで「我樂」の号が彫られている。60は石臼で池からの出土である。

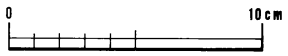
木製品（第18図）

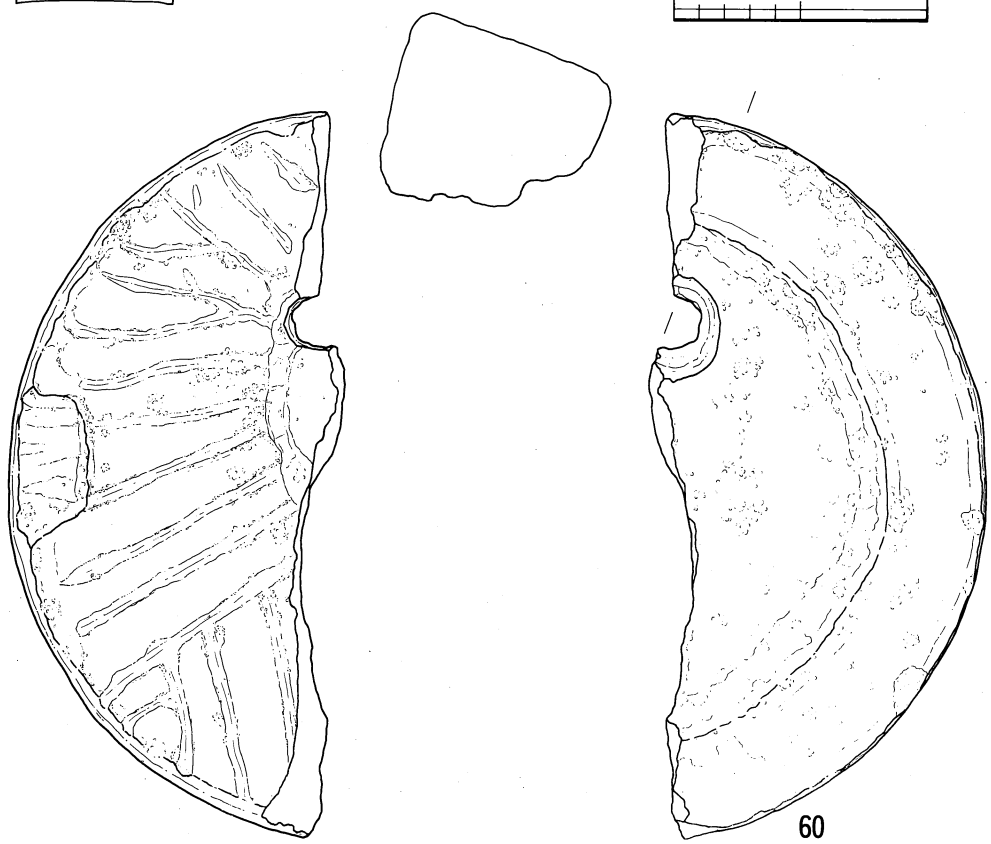
61・62共に池の下層から出土している。指擦れの跡から、61は右用、62は左用である。62の歯は削り出されている。

鉄製品（第18図）

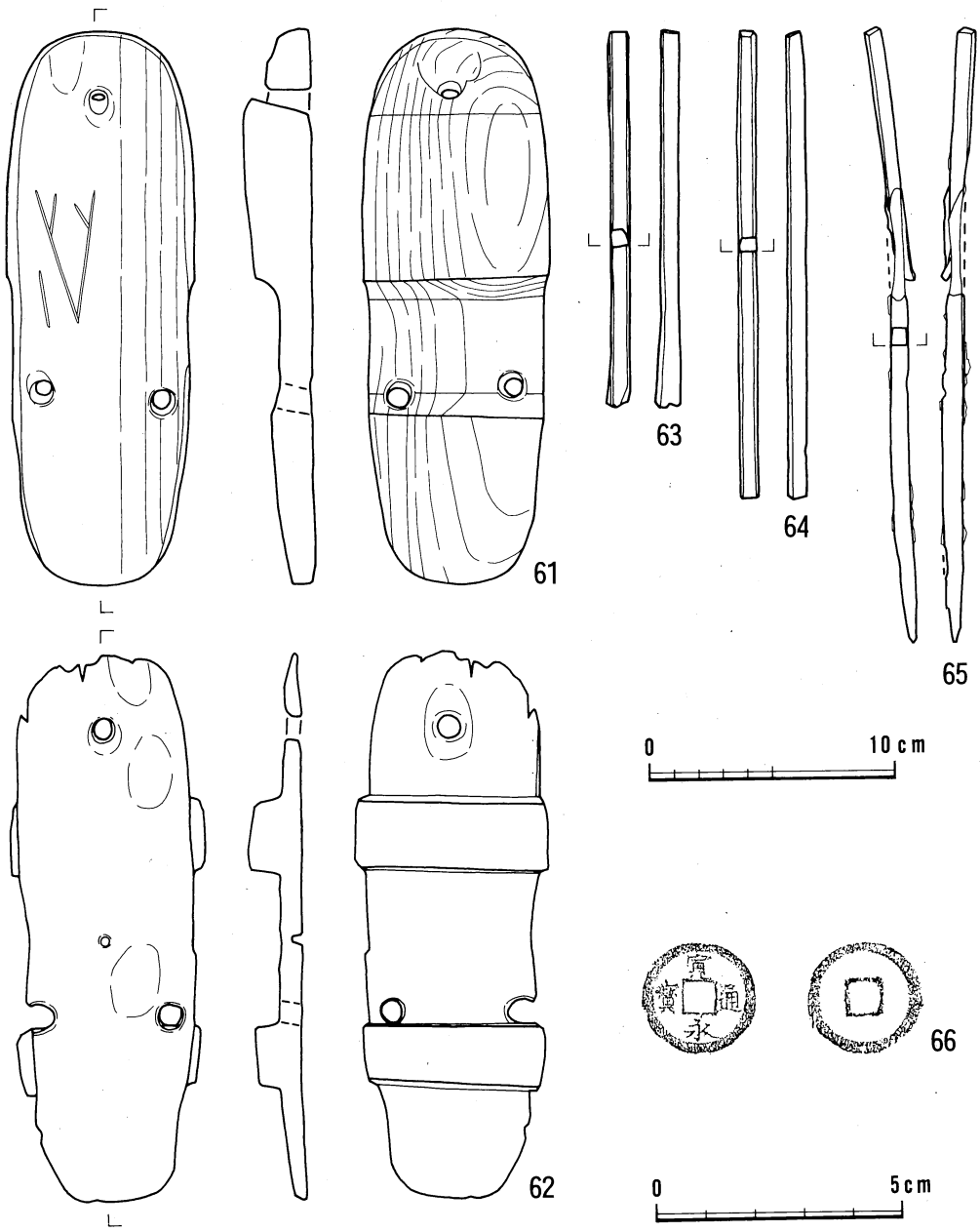
63～65は鉄製の釘で、錆着して一個体で出土した。池からの出土である。66は寛永通宝で、包含層からの出土である。







第17図　石製品実測図



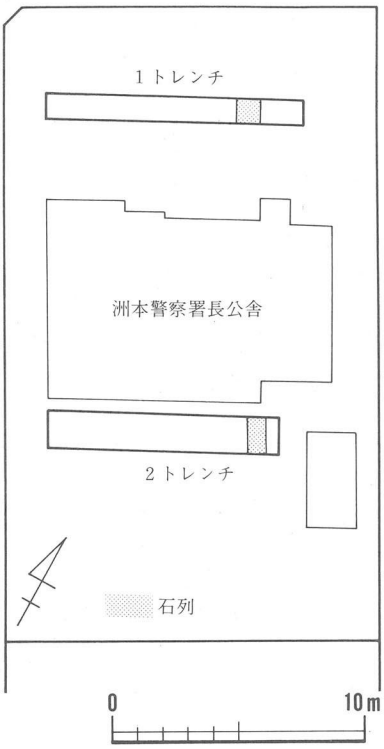
第18図　木製品・金属製品　実測図

第4章　ま　と　め

平成2年度の調査の結果をまとめると次のようになる。

① 築地塀の基礎と考えられる南北方向の石列を検出した。

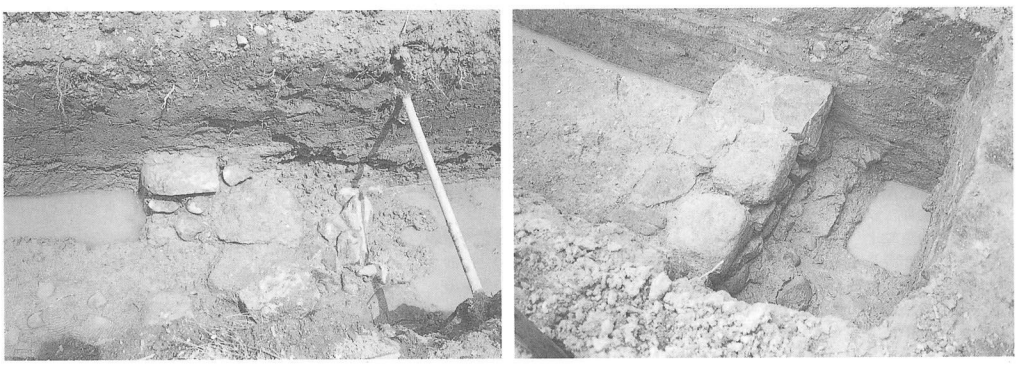
② この石列より東側と西側では、遺構面及び遺構の状況が異なる。どちらも現在に至るまで何度か盛土により地上げがされているが、西側ではしっかりとした生活面が認められ、遺構も池と溝及び土壙を検出している。また、攪乱が少なく、建物などが建っていた様子がない。東側では盛土をする際の攪乱が激しく、生活面は明瞭でない。攪乱土中には、石垣や柱の基礎であったと思われる多くの石が混ざっている。地山面も西よりは低く、特に北半分は低くなっており、全体として湿気が多く、石列の西側よりも住居としての立地条件は悪い。

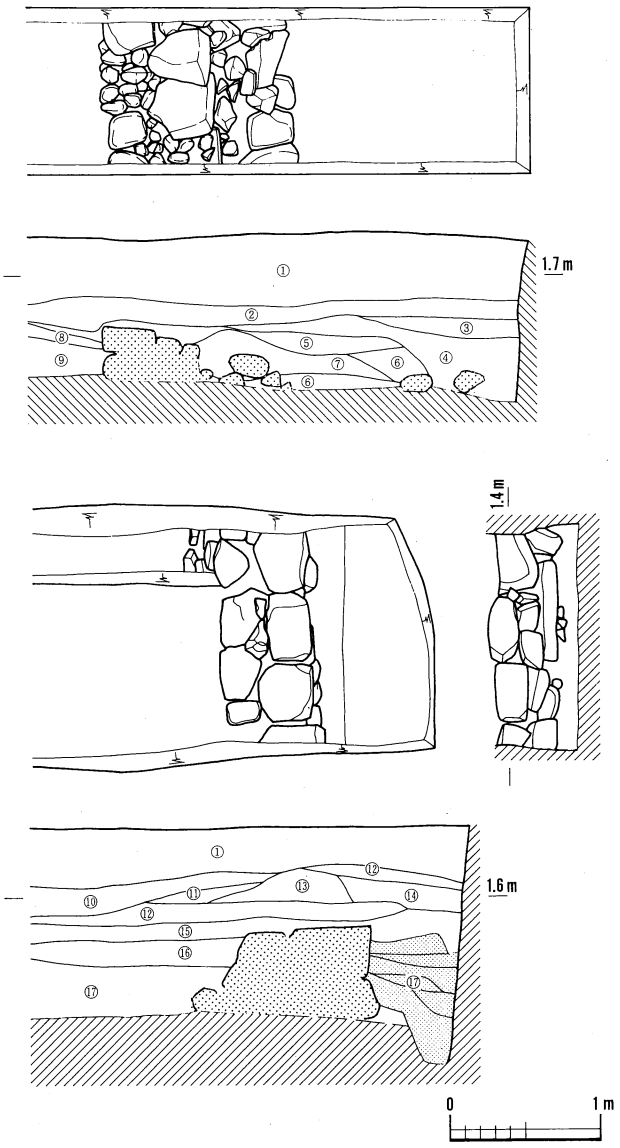


第19図　平成3年度確認調査位置図

③ 出土した遺物は、18世紀後半から19世紀代と考えられるものがほとんどである。

④ 石列の上層では、ほぼ石列と平行して溝2を検出した。溝2の時期は、出土遺物から明治時代以降と考えられる。また現在、洲本土木事務所長公舎と淡路教育事務所長公舎の間はブロック塀で区切られていたが、このブロック塀は溝2を埋めて築かれている。従って石列・溝2・ブロック塀にみられる南北のラインは、江戸時代後半から現在にいたるまで、


石列検出状況　（左）1トレンチ東端　（右）2トレンチ東端



〔土層名〕

① 表土・攪乱
② 暗灰色極細砂
③ 淡黄灰色極細砂
④ 灰色細砂
⑤ 明黄白色粘土
⑥ 4に5が混じる
⑦ 灰色粘土（土器・瓦を多量に含む）
⑧ 灰褐色細砂（土器・瓦を多量に含む）
⑨ 灰黄色細砂（しまっていない）
⑩ 淡黄灰色シルト混じり中砂
⑪ 黄橙色シルト
⑫ ブロック混じりのシルト
⑬ 暗黄色シルト
⑭ 暗褐灰色シルト混じり中砂
⑮ 黒灰色シルト混じり中砂
⑯ 暗黄色シルト混じり中砂
⑰ 溝の埋土
⑱ 褐灰色粗砂

第20図　平成3年度確認調査トレンチ実測図

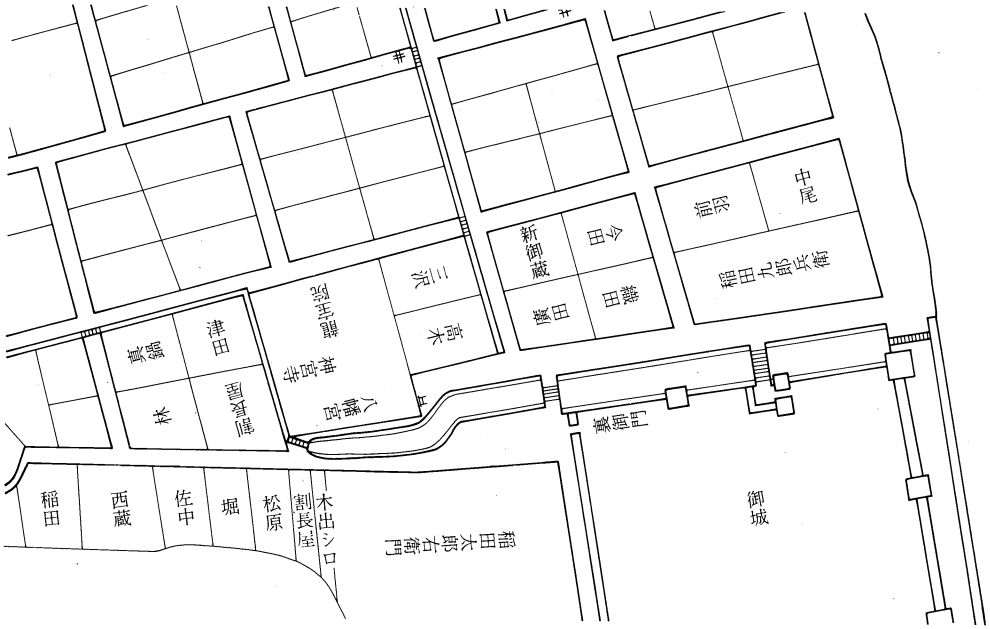
このラインにより東西を区画する意識が継続している。

平成3年度に洲本山手公舎の約30m北側にある洲本警察署長公舎の建て替えが計画され、兵庫県教育委員会は兵庫県警察本部からの依頼により確認調査を実施した。トレンチ2本による試掘である。その結果どちらのトレンチでも2～3段に積まれた南北方向の石垣を検出している。両方の石垣は、その下層に小礫を敷いてその上に築いているところや石垣の方向から、両トレンチで検出された石列は同一のものと推定される。この確認調査で出土した遺物も18世紀後半から19世紀代と考えられるものがほとんどであり、平成2年度調査の結果と同時期である。

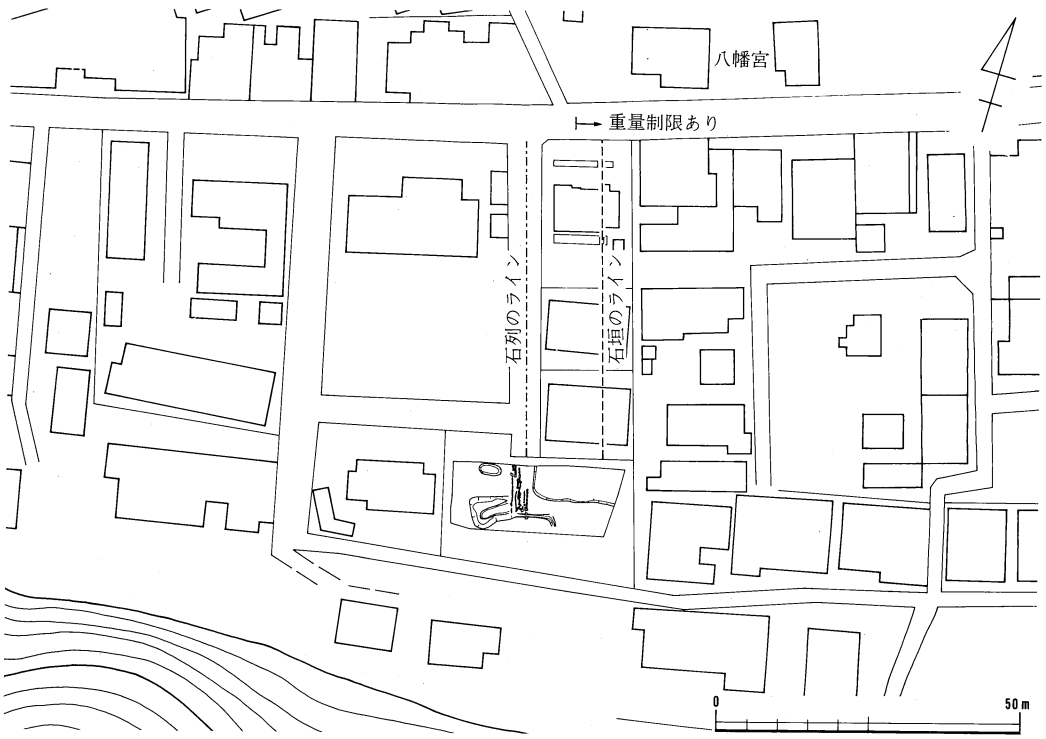
2本のトレンチのうち南側の2トレンチでは、石垣はトレンチの東端で検出されたが、石列の西側では生活面が認められ、しかも安定した面を形成している。石垣の東側は、溝を1mの範囲で検出したが、東側の肩はトレンチ外である。

平成2年度の全面調査と、平成3年度の確認調査の結果をまとめると第22図のようになる。東側の南北のラインは、確認トレンチで検出した石垣を結ぶラインを延長した線である。

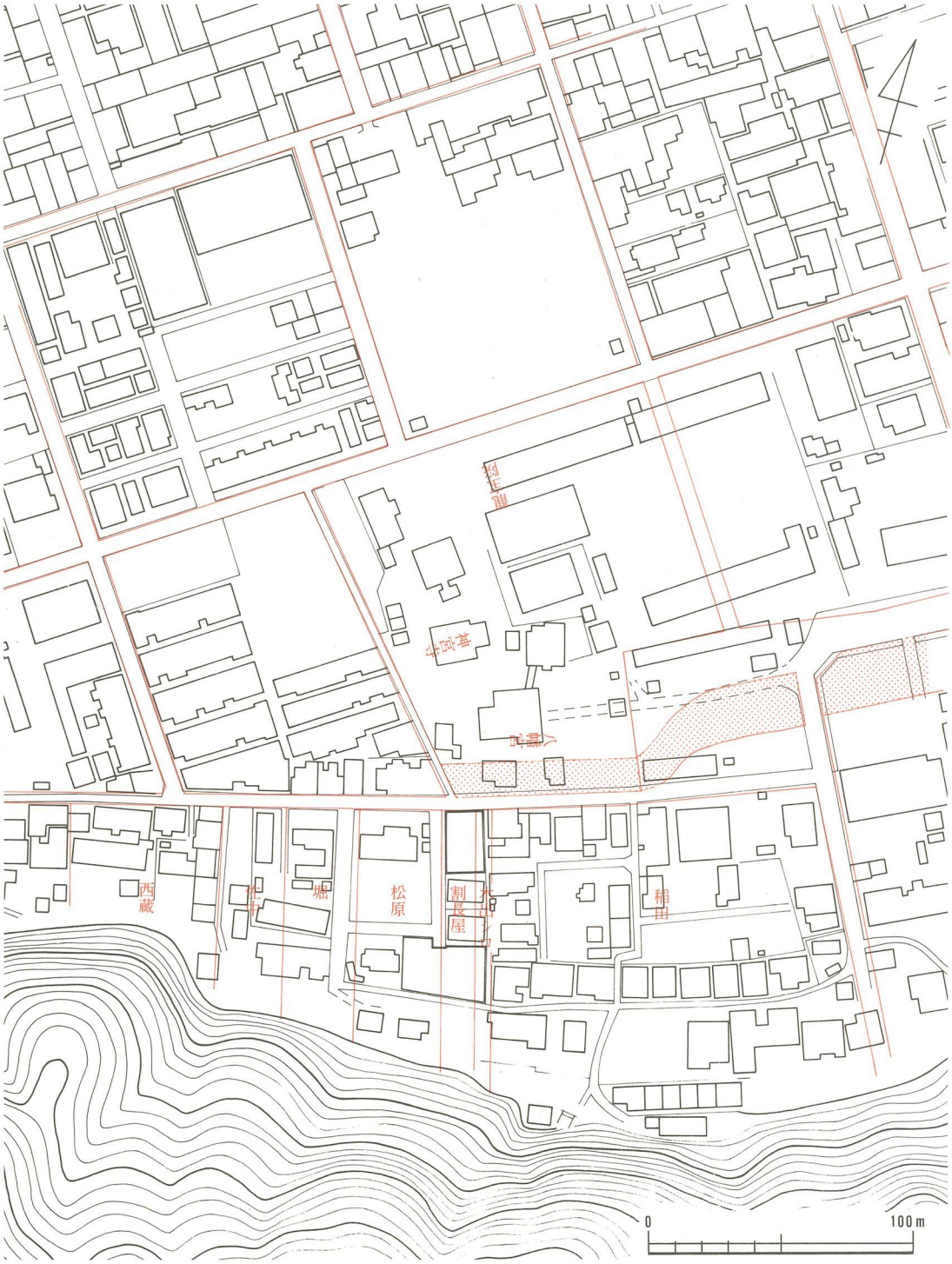
ところで、調査地点は、洲本城の城下町の内町に属し、洲本城跡や八



第21図　洲本城城下町絵図(模式図)



第22図　現況と調査結果



第23図　洲本城武家屋敷復元図

幡宮の近くであることから、洲本城城下町に関する絵図のうち屋敷割りが最も詳しく描かれている文政年間頃(1817年～1829年)と推定される絵図(図版Ⅰ)と比較することが可能である。両者を比較することにより、以下の点が注目される。

1．八幡宮は、現状とほぼ同じ位置と考えられる。

2．八幡宮の南側の道路は、八幡宮より東側については重量制限があり、これは絵図にある堀を埋め立てたためと思われる。

3．八幡宮の西の路地は、絵図にある堀(溝)と一致する。

4．絵図にある八幡宮西側の区画(割長屋・津田・真鍋・林)については、現在も当時とあまり変化していない。

5．絵図では「稲田太郎右衛門」の屋敷地の西側には「木出シ口」と描かれており、洲本市立淡路文化資料館で行った「おいでてはいりょ見てはいりょ城下町洲本」展の図録に掲載されている他の絵図(註)を参照すると「道」に当たる。

6．「木出シ口」の西には「割長屋」があり、その西は「松原」邸がある。

以上述べてきた、発掘調査の結果と絵図と現状の比較を検討すると、以下のような屋敷割りの復元が可能である。

① 平成3年度の調査で検出した石垣のラインは、「割長屋」の東のラインに一致するものと思われる。また2トレンチの東で検出した溝は、「木出シ口」と描かれた道の側溝である。

② 平成2年度の調査で検出した石列は、「割長屋」と「松原」邸の境の築地の基礎と考えられる。また石列の西側(3区)で検出した遺構は池と溝であり、「松原」邸の裏庭に当たるものであろう。

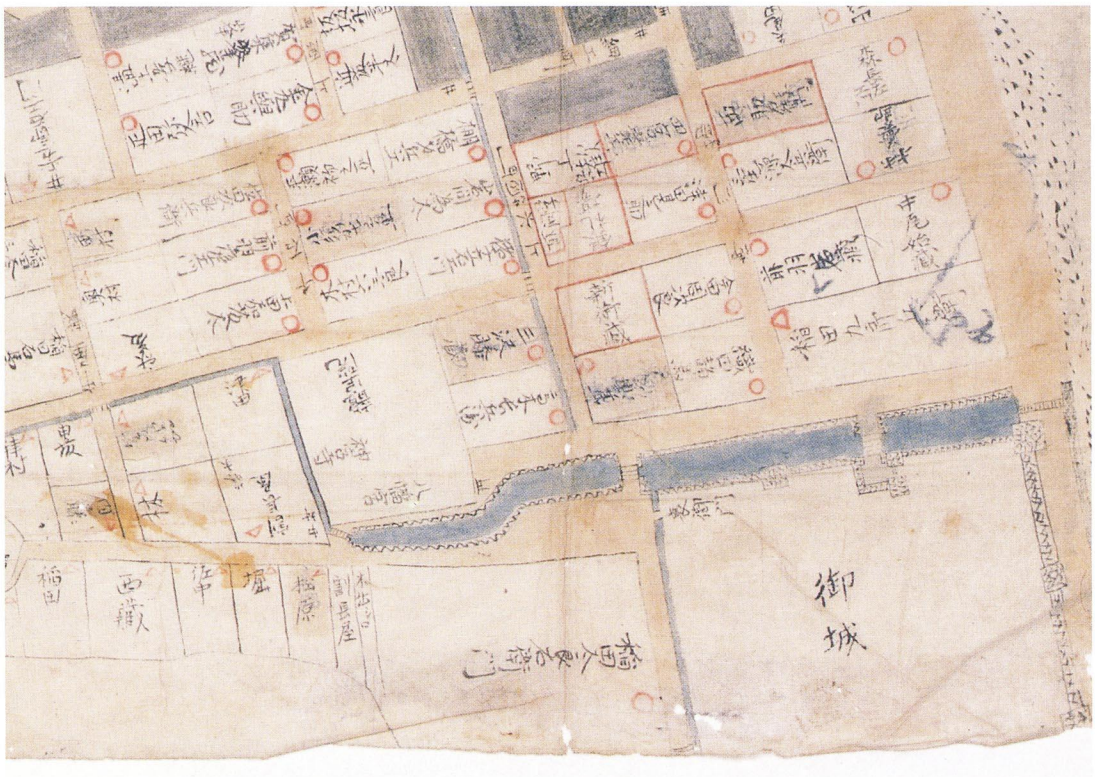
③ 従って平成2年度調査範囲は、「松原」と「割長屋」の南端部に相当する。

洲本の城下町は町割りが比較的よく残っており、道路はほぼ生きていると思われるが、この復元は、平成2年度に検出した数少ない遺構と、平成3年度の確認調査及び1枚の絵図から想定したものであるので、今後の調査により訂正・修正されねばならない部分が多くあると思う。平成4年度には、洲本警察署長公舎の建て替えが計画されており、復元図によると「割長屋」部分に相当すると思われる。新しい資料の増加により、新たな知見が得られることを期待する。

(註) 「おいでてはいりょ見てはいりょ城下町洲本」展 図録の14頁・15頁・19頁に掲載
(編集・発行)淡路文化資料館 昭和63年7月19日

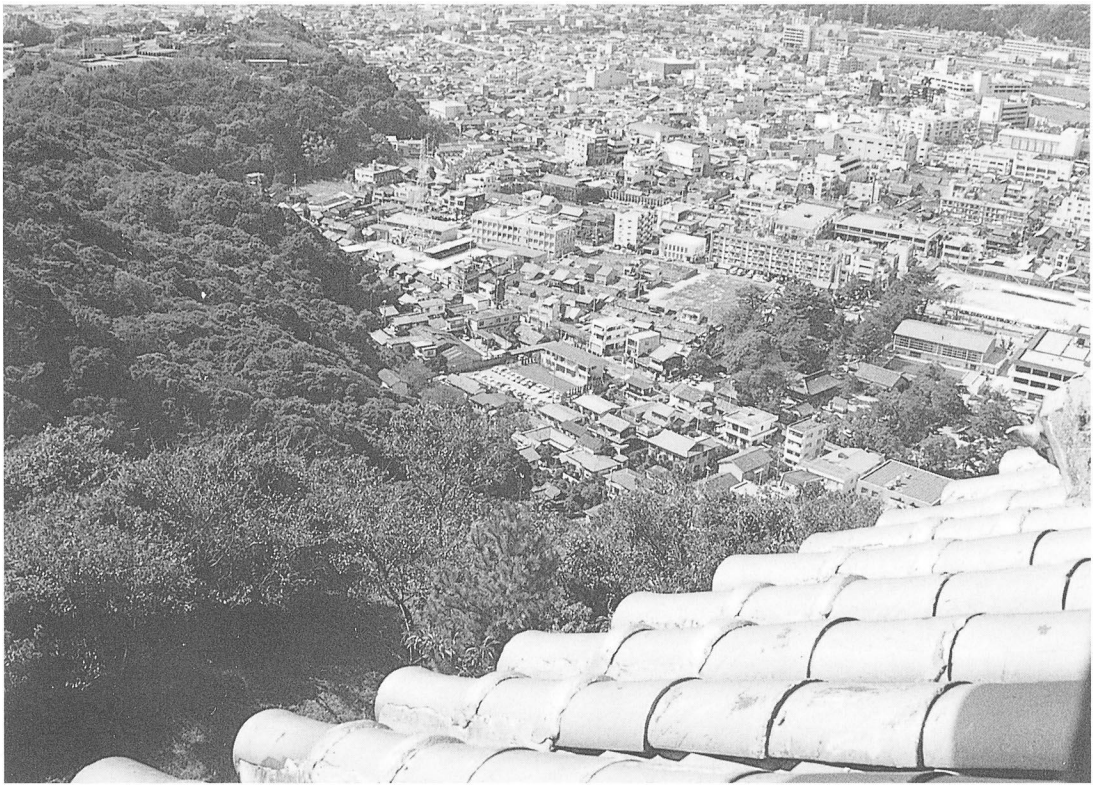
図　　版

洲本城御城下絵図（文政年間頃）



同　　（調査地区周辺のアップ）

図版Ⅱ　遠景

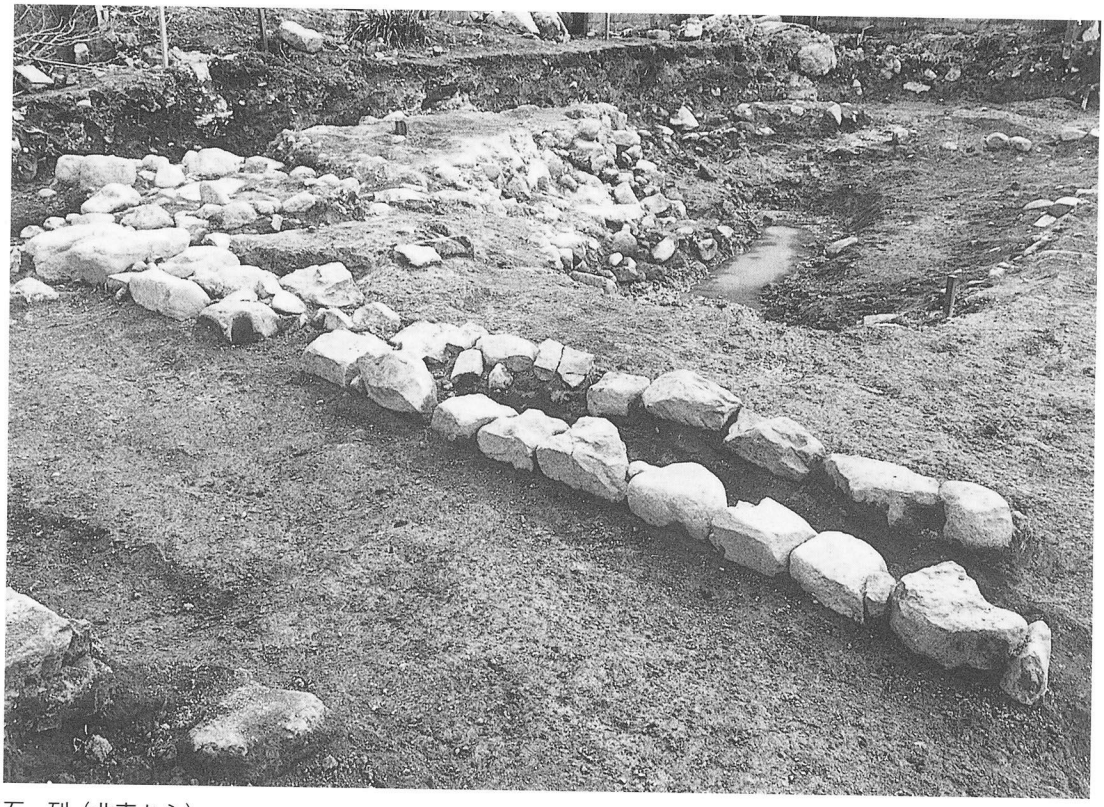


遠　景（洲本城天守閣より）

全　景（東から）

石列と池（北から）

石列と池（西から）



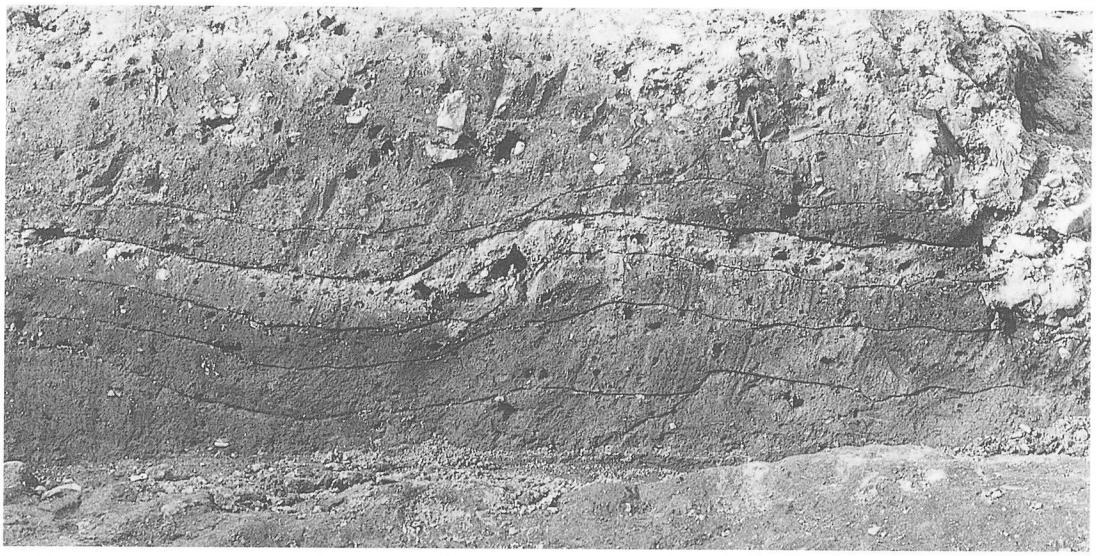
石　列（北東から）

石列と溝１の交差点（東から）

石列内　遺物出土状況

池の土層堆積

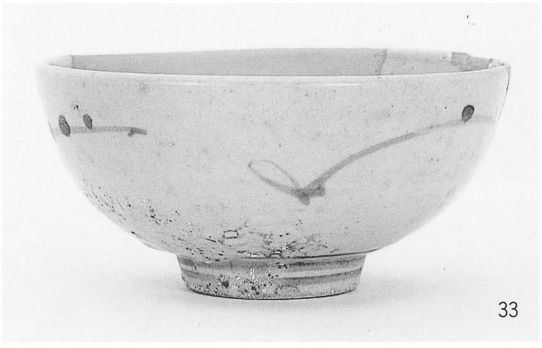
図版Ⅶ　土層堆積



（上）3区北壁　（中）同　アップ　（下）1・2区北壁

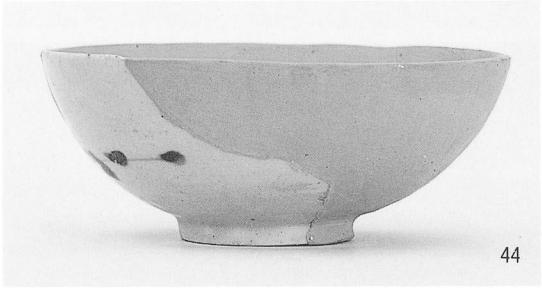
4

5


33

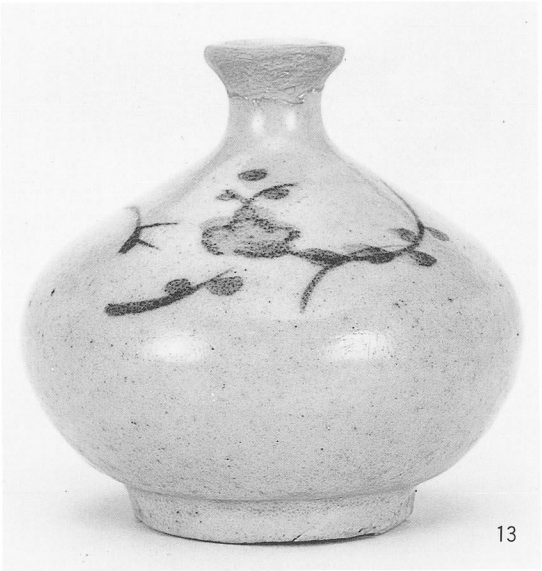
11

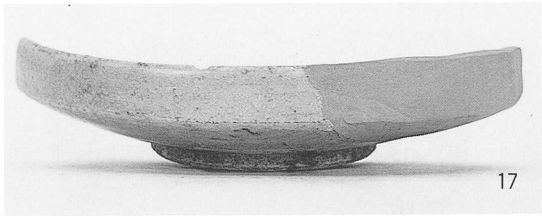
50


44

19

35


13


17

36

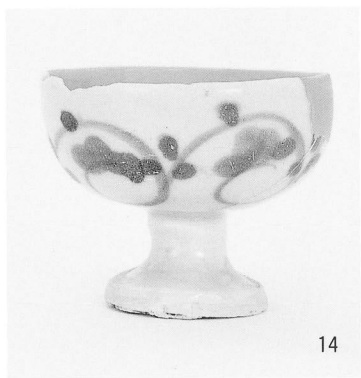
48

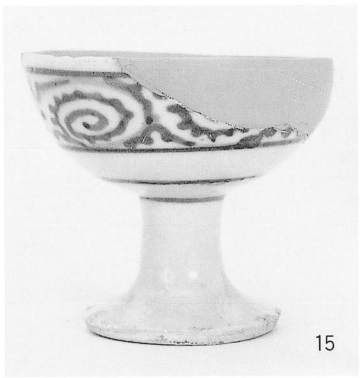
49

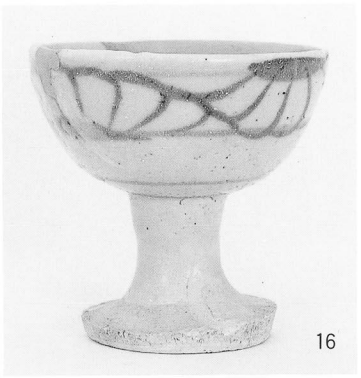
10

40

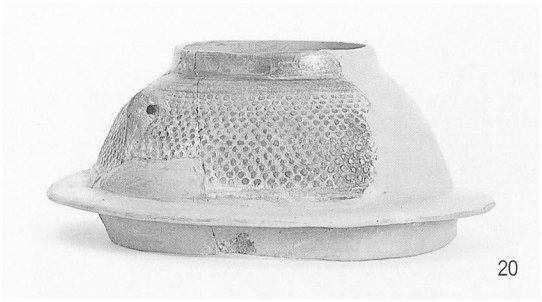
41

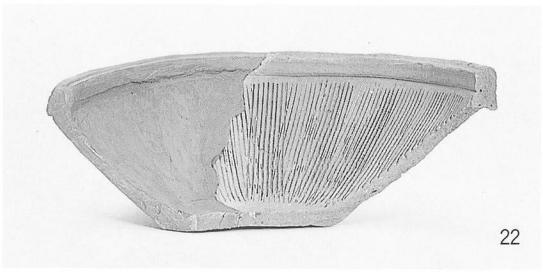

14

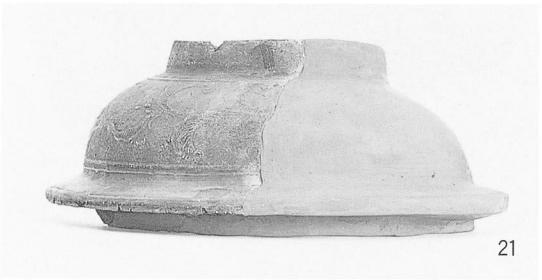

15

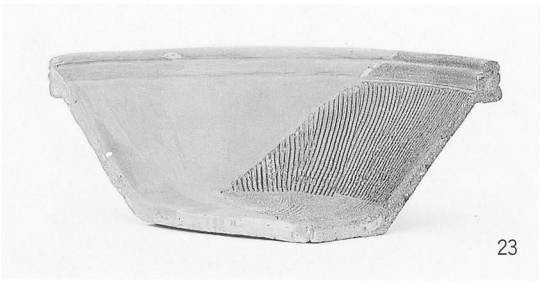

16

図版Ⅸ　遺物（土器・土製品）

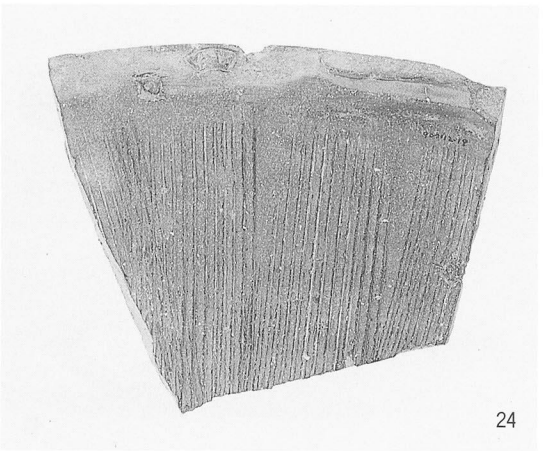

20


22

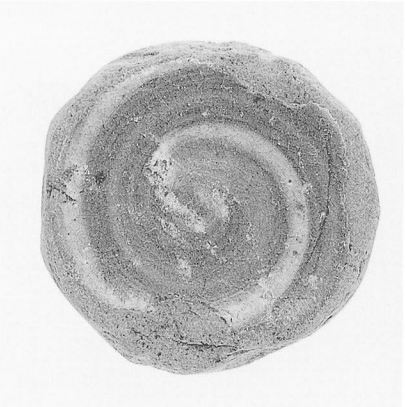

21

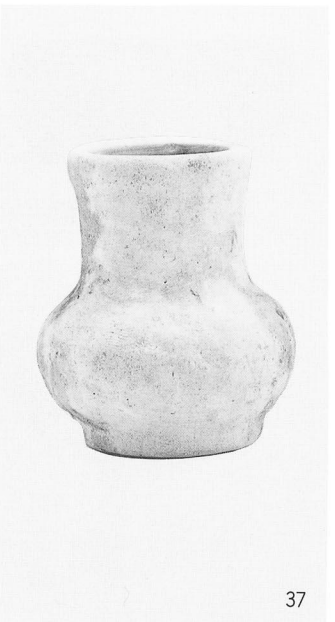

23

12


24

1

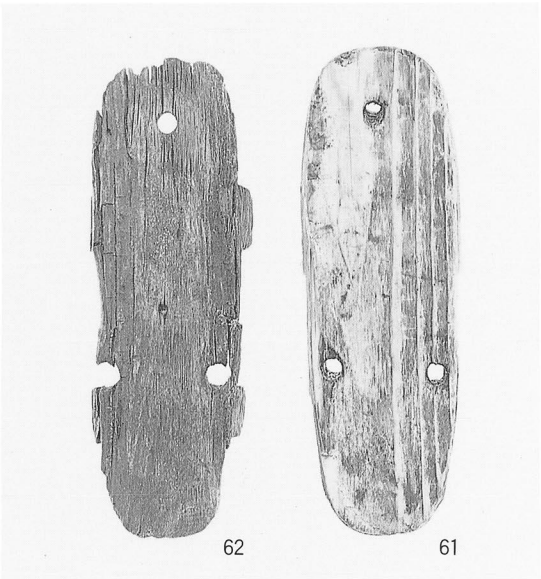


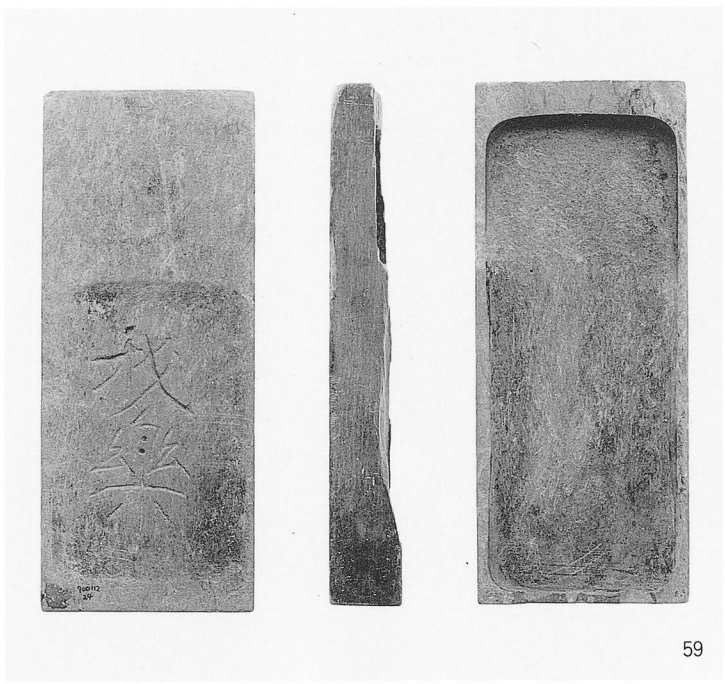

37

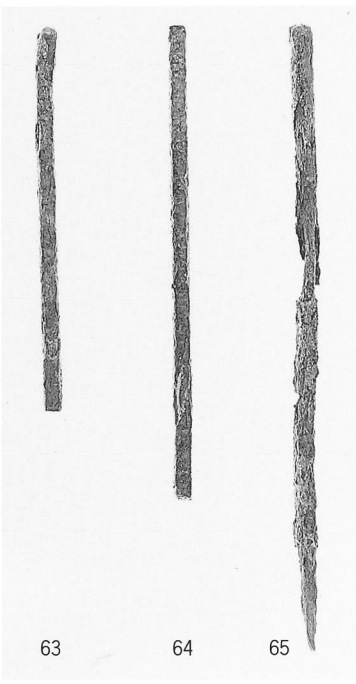
図版X　遺物（瓦・木製品・石製品・鉄製品）

57

58


62　61


59


63　64　65

兵庫県文化財調査報告書　第103冊

洲本城武家屋敷跡

― 洲本山手公舎建設事業に伴う発掘調査報告書 ―

平成３年９月30日　発行

編　集　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
〒652 神戸市兵庫区荒田町２丁目１－５
TEL　(078)531－7011

発　行　兵庫県教育委員会
〒650 神戸市中央区下山手通５丁目10番１号

印　刷　水山産業株式会社
〒653 神戸市長田区二番町３丁目４－１